

十全同窓会会報 183

2023 / 1



目次 | CONTENTS

新年のご挨拶……………02	病院紹介……………14	Student Doctor 認定証授与式 ならびに白衣着衣式……………28
就任挨拶……………03	教室だより……………16	十全昔話……………30
受賞……………05	十全学術行脚……………18	金沢大学医学生と 「生と死」を考える……………36
学会報告等……………08	金沢から世界へ発信……………20	著書紹介……………38
論説……………09	支部だより・クラス会……………21	学生コーナー……………39
寄附講座の紹介……………10	“メディカルオーケストラ金沢”の 演奏活動……………26	

新年のご挨拶



十全同窓会会長

山本 健

新年明けましておめでとうございます。十全同窓会会員の皆さまにおかれましては、ご健勝に新春をお迎えのこととお喜び申し上げます。年頭に当たり、ご挨拶を申し上げます。

新型コロナウイルスの感染は、ウイルスの遺伝子変異が次々と起こるなか、いまだ完全な収束を見るに至っていません。最前線で患者のために奮闘しておられる会員各位に御礼を申し上げます。自治体からのワクチン接種券送付間隔が次々短くなって、「もういくつ打つとお正月～」の戯れ歌が流行っているとかいけないとか。新型コロナウイルス感染症を第2類感染症から第5類感染症へ分類変更することを、遅ればせながら厚労省は検討するようです。インフルエンザと同じ扱いになれば医療機関の負荷は軽減されると期待できますが、時々「まだ一度も新型コロナワクチンを打ったことが無い」と仰る若い方やご高齢の方に出くわすことがあって、ワクチンへの理解度の差にびっくりします。

わたくし約5年前から能登地区で企業の嘱託産業医を務めていますが、中国に技術指導のため渡航する技術者さんを診てほしいと依頼されることがあります。ゼロコロナ政策に固執する中国ですから、28日間の渡航予定のうち、入国して10日間はホテルに隔離され、実際に技術指導が出来るのは休日を返上しても18日。そうまでして彼の地へ社員を送り込む意味があるのか、疑問に感じます。

新卒者の十全同窓会入会率が低下傾向にあることは以前から問題になっています。医学類学生諸君には入学時に同窓会会費(学生会費)を6年前納していただくようお願いし、納付率は80%を越えます。このほぼすべては、保護者の皆さまが合格祝いの感覚でお支払いいただいていると思われる。入学後は十全同窓会と医学類生個々人が交流する機会は大変少ないのが現状で、これが同窓会への帰属意識が育たない一因と考えます。2022年度にはこの状況を改善する一歩

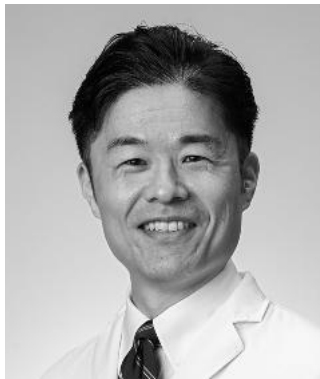
として、同窓会から医学類4年の学生諸君に、ドクター・コート(見慣れない横文字ですが、昔風の長袖白衣。校章と大学名の刺繍付き)を贈呈することにしました。従来医王保護者の会が贈呈しておられた部分を、同窓会が肩代わりさせていただいた形です。2022年10月27日(木)午後、臨床実習開始前の4年生を対象に十全講堂で開催された、Student Doctor認定証授与式の中で、大竹茂樹同窓会副会長から贈呈を行いました。ご発案いただいた絹谷清剛同窓会理事、ご理解をいただいた医王保護者の会土山寿志会長、関係各位に御礼申し上げます。

コロナ禍で開催が控えられていた支部総会も、徐々に開催され始めています。支部の活動は卒業生が同窓の先輩と交流できる貴重な機会です。わたしは先日関西地方の支部総会にお招きいただきました。80歳を越えられて矍鑠とした大先輩がご出席になり、「話の合う年代の卒業生が減って、会に出てもおもしろくない」と吐露されました。すかさず支部会長と役員の方々が先輩を盛り上げ、若い先生方も金沢時代の思い出を次々ご披露になって、和やかな雰囲気になりました。支部会員の皆さま、大先輩を大切にいたしましょう。

昨年、新年のご挨拶でご紹介したApple Watch 7の「転倒検知機能」、実体験する機会がありました。昨年3月、自宅で起立性低血圧を起こして転倒したのですが、“転倒したようですが大丈夫ですか～”とApple Watchが声をかけてくれました。幸い近くに家人がいたので大事には至りませんでした。もしそのまま1分間応答しないと、予め設定してある緊急連絡先に電話がかかり、転倒者の位置情報が伝えられたはず。まさに“頼れる高齢者の友”。

本年が会員の皆さま、金沢大学医学類・医学系ならびに十全同窓会にとり幸せな一年になりますことを祈念し、新年のご挨拶といたします。

就任挨拶



多田 薫 博士

(平成13年卒業)

育成と連携強化を ミッションとし取り組む

この度、金沢大学医薬保健学域保健学類作業療法学専攻の教授を拝命し、令和4年10月1日付けにて就任いたしました。

金沢大学医薬保健学域保健学類作業療法学専攻教授に就任

私は平成13年に神戸大学医学部を卒業し、金沢大学医学部附属病院整形外科に入局いたしました。平成15年には金沢大学大学院医学系研究科に進学し、富田勝郎名誉教授のご指導の下、創傷治癒に関する基礎研究を行いました。また、手の疾患を専門とする「手外科(てのげか)」班に配属していただき、池田和夫先生に手外科のいろはをご指導いただきました。さらに、新潟手の外科研究所や広島手の外科・微小外科研究所での研修の機会を賜りました。

学位取得後は土屋弘行教授のご指導の下、手外科班の主任として多くの臨床経験を積ませていただくとともに、末梢神経の再生や癒着予防に関する基礎研究に取り組んでまいりました。

附属病院に在籍中は臨床や研究に関して多くの科の先生方にお力添えをいただ

きました。医師として、研究者として充実した生活を過ごすことができましたのは、先生方のお力添えの賜物であると心より感謝しております。この場をお借りして御礼させていただきます。

今後は「世界に羽ばたく作業療法士の育成」と「医学類と保健学類の連携の強化」を私のミッションとして取り組んでいきたいと考えております。また、和田隆志学長のお言葉にありましたように、「学生や教職員が誇りと愛着を持ち、人が輝く金沢大学」をつくるために、生まれ育った故郷である金沢を愛する者として誠心誠意、貢献させていただく所存です。

金沢大学十全同窓会の先生方には、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

秋の叙勲

藍綬褒章

小林 敏宏
(昭和59年卒業)

旭日小綬章

小森 貴
(昭和54年卒業)

瑞宝小綬章

上田 博
(昭和47年卒業)

岩田 章
(昭和51年卒業)

松原 四郎
(II会員)

旭日双光章

町谷 肇彦
(昭和39年卒業)

瑞宝双光章

中村 國雄
(昭和42年卒業)

就任挨拶



木村 慎吾 博士

(平成8年卒業)

ウィズコロナ時代に即した
公衆衛生活動を模索し実践

このたび、令和4年4月8日付で、石川県健康福祉部次長兼健康推進課長に就任しました。

私は、平成8年に金沢大学医学部を卒業後、厚生省(現・厚生労働省)に入省し、健康危機管理対策、疾病対策、がん対策等に従事し、平成20年に石川県庁に転職しました。この間、金沢大学には公衆衛生学教室(現・衛生学・公衆衛生学教室)の研究生として在籍し、荻野景規前教授、中村裕之教授のご指導の下、学位を取得させていただきました。また、学位取得後は、非常勤講師として、公衆衛生学の講義などに携わらせていただいています。

石川県健康福祉部次長兼健康推進課長に就任

石川県庁では、平成20年度から令和3年度までの14年間、健康福祉部地域医療推進室の担当課長や室次長として、医療行政に携わってきました。

最初に携わった仕事は、医師確保対策です。着任時、臨床研修制度の必修化などの影響により、医師不足問題が顕在化していました。県は、金沢大学に医学部定員増を要請し、平成21年度に特別枠を創設していただくことになりました。これまでに132名が入学し、現在、51名の医師が臨床研修を修了し、能登北部などの基幹的な病院で活躍しています。歴史的に、金沢大学の各診療科では、地域の基幹的な病院に医師を派遣し、医師を養成する仕組みを構築されています。お蔭様で、金沢大学の各診療科と地域医療教育センター、行政が連携することにより、「地域医療の確保」と「特別枠医師キャリア形成」の両立を図った運用ができていのではないかと考えています。

新型コロナウイルス感染症の流行後は、県の医療調整本部において、患者の入院調整や新型コロナの医療提供体制の確保を担当させていただきました。第1波の際にはさまざまな課題が山積する中、諸先輩の皆さまのご理解のもと、約200床を超えるコロナ病床を確保することが出来ました。医療調整本部では、貴重なコロナ病床を有効に活用するため、医療調整コーディネーターのご指導の下、病

院や保健所等の関係者を繋ぐホットラインを設置し入院調整に取り組むとともに、病院別の入院患者数など情報の一元化と共有に努めました。また、感染症状に応じて、宿泊療養施設の開設、メディカルチェックセンターの開設、自宅療養者の支援体制の構築など、対策の見直しを行いました。こうした医療機関の枠組みを超えた連携、臨機応変な対応は、この地域に伝統的に受け継がれている、医療関係者の連帯感に支えられていたと感じております。

今春からは、石川県健康福祉部次長兼健康推進課長として、生活習慣病対策、がん対策、難病対策、感染症対策などを担当させていただいています。本県では、以前からメタボリックシンドロームや糖尿病などが健康課題になっていましたが、新型コロナウイルス感染症の流行後、こうした疾患は増加しています。また、コロナ禍により、特定健診やがん検診の受診率は低下しており、改善を要する状況になっています。諸先輩方にご指導をいただきながら、医療関係者が協働して対応いただける地の利を生かし、ウィズコロナの時代に即した公衆衛生活動を模索し実践していきたいと考えております。今後もご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしく願いいたします。



受賞

令和4年度金沢大学ダイバーシティ顕彰授賞式

「かいのきダイバーシティ推進賞緑蔭賞」を受賞 白井 溢先生(昭和39年卒業)

2022年12月23日(金)に角間キャンパスで開催された令和4年度ダイバーシティ研究環境推進シンポジウムにおいて、白井溢先生(昭和39年卒業)が「かいのきダイバーシティ推進賞緑蔭賞」を受賞された。金沢大学では、「金沢大学ダイバーシティ顕彰」として、ダイバーシティ研究環境形成に貢献した教職員等及び優れた女性研究者に「かいのきダイバーシティ推進賞」と「はあざみ女性研究者賞」を授与している。

当日は和田隆志学長(昭和63年卒業)より賞状と副賞が授与されるとともに、「はあざみ女性研究者賞」の原点である「中村賞(金沢大学女性研究者賞)」創設者の中村信一第10代学長(昭和43年卒業)から顕彰の歴史と趣旨を交えたお祝いの言葉があり、続いて白井先生のご挨拶がご子息の白井岳様によって代読された。

中村先生と白井先生のお言葉は感銘を与えるものであり、同窓会会報編集部は本学ダイバーシティ推進機構男女共同参画推進ユニットのご協力を得て紹介する。

祝辞

中村 信一

ご紹介賜りました中村でございます。一言お祝いを申し上げます。

「緑蔭賞」を受賞されました白井先生、「彩果賞」を受賞されました浅川先生、「中村賞」を受賞されました高橋先生、「紫花賞」を受賞されました小林先生、「若葉賞」を受賞されました石野先生、岡本先生、北島先生、三村先生、誠にありがとうございます。心からのお祝いを申し上げます。

この機会に白井先生を少し紹介させていただきたく存じます。白井先生は私の4年先輩でございまして、私の学長時代には、男女共同参画のみならず、国際化、留学生の増加に大いにご支援いただきました。また、当時構想しました旧制第四高等学校を記念する施設の設置に強く賛同いただき、先生のご支援により設置の方向に向かっている由、大変嬉しく存じます。さらには、学長退任後、鈴木大拙に関わる国際賞のご相談をいただき、素晴らしい国際賞が設けられました。改めて心から厚く御礼申し上げます。

金沢大学は平成29年より、富山県立大学様、YKK株式会社様と共に文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(牽引型)」に選定され、取組を進めています。また、令和3年度には「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」にも選定され、取組を更に発展させているところです。

優れた研究業績の女性研究者の顕彰は「中村賞」から出発し、「紫花賞」と「若葉賞」を加えて「はあざみ女性研究者賞」へと成長しました。今年度には、男女共同参画推進やワークライフバランス推進、女性研究者の育成等への貢献者を顕彰する「かいのきダイバーシティ推進賞」を拡張し、二つをあわせて「金沢大学ダイバーシティ顕彰」にまで発展しました。賞の発展と共に、素晴らしい女性研究者の活躍や男女共同参画推進の取組を見守ることができ、大変喜ばしく思います。

私は大学における男女共同参画は、ダイバーシティの視点から、いろいろな特質を持つ研究者が存在するという点で極めて重要であり、その中での学術研究からこそ、新たな知の創造が生まれるという考えを以前から持っています。そのようなダイバーシティの本質をとらえて、大学は社会の一步先を歩み、ダイバーシティ研究環境実現を先導していただきたく存じます。

2022年11月22日、日経新聞一面、「脱少子化へ家族再定義」「多様さ、繁栄の源泉」とございます。ダイバーシティこそが、世界が進むべき道であると確信しています。

今回受賞されました先生方におかれましては、是非研究者の先頭に立って活躍され、また金沢大学におかれましても富山県立大学様、YKK株式会社様と共同でダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業に取り組むことにより、一層発展していくようお願い、お祝いの言葉と致します。本日は誠にありがとうございます。

受賞者代表挨拶

白井 溢

中村信一先生、お祝いのお言葉をいただきありがとうございます。受賞者を代表いたしまして、感謝申し上げます。

私はこれまで、母校である金沢大学のさらなる発展を願い、教育研究に関するさまざまな取組について支援を行ってまいりました。

男女共同参画推進については、金沢大学の教育研究の発展において重要な課題と考え、埋もれがちな女性研究者の業績に光をあてる「はあざみ女性研究者賞」の設立に携わりました。今や「金沢大学ダイバーシティ顕彰」にまで発展し、蒔いた種が着実に成長していることを大変嬉しく思っております。

図らずも今回、その取組をこのような形でご評価いただき、「かいのきダイバーシティ推進賞(緑蔭賞)」を賜りましたことを大変光栄に思い、心より感謝いたします。今回の受賞が、男女共同参画推進や多様性を尊重することの重要性を再認識するきっかけとなり、金沢大学はもとより北陸地域において取組を行う方々にとって大いに励みとなるものと信じております。

これを機に、より一層教育研究におけるダイバーシティ環境の拡充に貢献してまいります。

本日は誠にありがとうございました。



受賞

高安賞創設20周年

高安賞は本学昭和39年卒業の臼井滋先生(医療法人社団明徳会理事長)のご篤志により創設され、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者を表彰し、学術研究の振興及び若手研究者の育成に貢献することを目的としています。この高安賞は、高安病の発見者で旧制金沢医科大学の初代学長を務められた高安右人博士を記念して平成15(2003)年に創設され、今年20回目の節目を迎えることができましたので本稿で改めてご紹介いたします。

高安賞では、最優秀論文賞1篇、優秀論文賞2篇(年度によっては3篇)を第一次審査会(主査および副査)、医学専攻長などから構成される選考委員会、博士課程委員会を経て選考し、賞状、及び正賞として盾、また、副賞として研究経費を

贈呈しています。過去20回で基礎医学から臨床医学までの幅広い研究分野から計61名が受賞しており、これまでの受賞者の多くはPhysician Scientistや医科学研究者として活躍しています。受賞者の中にはさらに研究を大きく発展させてアカデミアで指導的な立場に着任した研究者が現れ始めており、高安賞は金沢大学大学院で研究に取り組む博士課程学生にとって最上の励みとなっているとともに、金沢大学で行われている医学研究の質を高めることに極めて大きな貢献を果たしてきたといえましょう。

高安賞20年の歴史でもう一点重要なことは金沢大学の国際化への貢献です。計61名の受賞者のうち少なくとも19名が日本国外に直接のルーツを持ち、金沢大学の学位(Ph.D.)をもとに金沢大学のみならず日本国内、母国、さらに米国など第三国の大学や研究所で活躍をしています。留学生の飛躍が高安賞受賞者ネットワークという形で可視化されることは、日本出身の学生にも大いに刺激になって

いることと思います。このように高安賞は、金沢大学の基本理念である「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」「グローバルに生きる金沢大学」「東アジアの知の拠点」に大きく寄与してきました。(なお、国際化促進については、臼井国際医学奨学金、金沢大学学生医学研究推進臼井奨学金でも留学の受入と送出を積極的にご支援いただいております。本会報170号)

この会報がお手元に届く令和5(2023)年は旧制金沢医科大学の設立(1923年)から100周年になります。初代学長高安博士の威徳は今後も、高安賞を通じて、若い医学徒の探究心と挑戦心を奮い立たせてくれることでしょう。高安賞創設に多大なるご貢献を賜りました臼井先生、この20年間高安賞の運営と選考に携わってこられた医学専攻長並びに大学院博士課程指導教員の先生方、学生課(大学院担当)をはじめとする事務職員の皆さまに謹んで感謝いたします。

(編集委員 倉知 慎：記)

教授退職記念講演会のお報せ

謹啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて金沢大学医薬保健研究域医学系(放射線科学分野)蒲田敏文教授・(整形外科学分野)土屋弘行教授には令和5年3月31日をもって医学系教授を御退職されます

つきましては左記のとおり記念講演会を挙行することとなりましたのでご案内申し上げます

令和5年1月吉日

謹白

金沢大学医薬保健研究域医学系長

杉山 和久

記

記念講演会

日時 令和5年3月18日(土) 午後2時から
場所 金沢大学宝町キャンパス 十全講堂1階ホール

(記念講演会後の記念式は行いません)

事務担当 医薬保健系事務部総務課総務係
(電話番号) 076-265-2100

21st ISOLS Best Presentation Award (Flash Session) 受賞

武内 章彦

(平成19年度大学院修了)

金沢大学附属病院整形外科

この度、国際患肢温存外科学会(International Society Of Limb Salvage : ISOLS)において、Best Presentation Awardを受賞させていただきました。ISOLSは骨軟部腫瘍を専門とする整形外科医が参加する最大の国際学会で、2017年には当科の土屋弘行教授が会長を務め、金沢で開催されました。2年毎の開催ですが、コロナの影響で1年延期されアメリカのロサンゼルスで9月に開催されました。演題は“Randomized Placebo-Controlled Double-Blind Phase II Study of Zaltoprofen for Patients with Diffuse-Type and Unresectable Localized Tenosynovial Giant Cell Tumors: the REALIZE study”で腱滑膜巨細胞腫という膝や足関節などに発生する難治性の良性軟部腫瘍に対して、非ステロイド性抗炎症薬であるザルトプロフェンのドラッグリポジションを目指した医師主導治験の結果です。この治験は当科で見いだした知見をもとに特許申請から治験の立案まで行い、疾患の希少性から全国11施設で実施させていただきました。試験の結果は、プライマリーエンドポイントであるプラセボと比較しての手術加療を要する重大なイベントの抑制率に有意な差は出ませんでした。関節機能が有意に改善されました。本疾患は手術以外の治療が確立しておらず、また手術後の再発率も高いことから腫瘍の増殖を抑制しつつ患肢機能を改善して日常生活動作を維持するという新しいアプローチになり得ると考えられました。治験の立案から実施にあたり、附属病院先端医療開発センターの村

山敏典センター長、野村章洋准教授には多大なご支援をいただきました。治験の運営には日本医師会治験促進センターとAMEDの研究助成に加え、附属病院臨床研究助成にもご支援をいただきました。末筆となりますが研究をご指導いただいた土屋弘行教授、治験に携わってくださったすべてのの方々に心より感謝申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



第33回日本緑内障学会 優秀学術展示賞受賞

宇田川さち子

(平成30年卒業)

金沢大学附属病院眼科

この度、第33回日本緑内障学会・優秀学術展示賞を受賞いたしましたので、ご報告させていただきます。受賞した演題は、「黄斑上膜合併緑内障における構造と機能との関係：乳頭周囲網膜神経線維層厚と血管密度および黄斑部網膜内層厚の比較」です。緑内障は、網膜神経節細胞とその軸索である網膜神経線維が障害され、視野(見える範囲)が障害される疾患です。日本における中途失明原因の第1位であり、国内の緑内障疫学調査(Tajimi Study)では、40歳以上の日本人における緑内障の有病率は5.0%と報告されています。黄斑上膜は網膜の表面にセロファン状の膜がはり、それによって視力低下や歪視、物が大きく見える(大視症)などが生じます。黄斑上膜は硝子体手術によって視力改善が期待できますが、進行した緑内障を合併した眼では硝子体手術が引き金となり、中心視野障害を悪化させることを以前、当教室から報告しました。今回は、黄斑上膜合併緑内障の視野と視神経乳頭周囲の網膜神経線維層厚、血管密度および黄斑部網膜内層厚の関係を比較検討しました。結果として、黄斑上膜合併緑内障では、視神経乳頭周囲血管密度のほうが、網膜神経線維層厚および黄斑部網膜内層厚よりも、視野感度との関連が良好であることがわかりました。今後も、手術適応の評価や術後視野の長期経過などを検討し、臨床に還元できるように研究をさらに発展させてまいりたいと思います。

研究のご指導をいただきました杉山和久教授、東出朋巳准教授、共同研究者の先生方に心より感謝申し上げます。

学会報告等

第13回世界核医学会、第62回日本核医学会学術総会

会期/令和4年9月7日(水)～9月11日(日) 場所/国立京都国際会館

令和4年9月7日～11日に第13回世界核医学会を、第62回日本核医学会学術総会・第42回日本核医学技術学会総会学術大会(会期9月9日～11日)と合同でハイブリッド形式にて開催し、2150名の参加を得て成功裏に大会を終えました。

世界核医学会(WFNMB)は、国際原子力機関の支援の下、世界各国で4年毎に開催される学会であり、第13回世界核医学会・第62回日本核医学会学術総会の会長を拝命した金沢大学核医学教室の絹谷清剛教授を中心に約10年前から日本核医学会が一丸となり誘致に努め、第1回大会以来約50年ぶりの日本開催となりました。学会テーマを「Summarize the past half century and discuss the next half century of WFNMB」とし、世界各国の核医学診療の推進を目的とした活気

あふれる討論が5日間行われました。

開会式では天皇陛下より温かいビデオメッセージを賜り、ノーベル賞受賞者である田中耕一先生の基調講演を皮切りに、昨今世界中で熱い視線が注がれているPSMA治療をはじめとした核医学治療やアミロイドPET、発展途上国の核医学普及を目的としたセッションなど、非常に充実したプログラムが連日行われました。また、第62回日本核医学会学術総会・第42回日本核医学技術学会総会学術大会の特別講演では、国会議員をはじめとする立法に携わる方々から放射線核種の国内製造に向けた取り組みに関する講演が行われ、ウクライナ情勢やCOVID-19などの昨今の混沌とした国際情勢も踏まえた放射線核種の国内製造の必要性があらためて強く認識されました。

本学会に続いて9月12日～13日に石川県立音楽堂で世界核医学会Post-Congress Symposiumを開催し、COVID-19による入国制限下にも関わらず20か国近くの海外参加者に金沢まで足を運んでいただきました。シンポジウム後のエクスカージョンツアーの1コマが翌日の北國新聞朝刊の第一面を飾り、思いもかけないよい記念となりました。

本学会の開催にあたり、国内外の核医学関連の先生方だけでなく、和田隆志学長・蒲田敏文病院長をはじめ金沢大学の多くの皆様に多大なご協力、ご支援をいただきましたこと、この場を借りて心より御礼申し上げます。

(第13回世界核医学会総務・

第62回日本核医学会学術総会事務局長
萱野 大樹：記)



論 説

医学教育分野別評価を受審して

医学教育研究センター 太田 邦雄

2023年問題とJACME

2002年の学校教育法改正に伴い、2004年度以降、わが国の大学は、文部科学大臣の認証を受けた3つの評価機関、すなわち大学基準協会、大学評価・学位授与機構、日本高等教育評価機構による評価を7年以内の周期で受けることが義務化されましたが、医学教育に関する個別の分野別評価は制度化されていませんでした。一方、イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア等の欧米諸国のみならず、韓国、台湾、タイ、マレーシアなどのアジア諸国においても、医学教育分野別評価が実施されつつありました。このような世界的趨勢のなか、2010年9月に、米国医師国家試験受験資格審査NGO団体(ECFMG)から、「2023年(※)以降は、国際基準で認定を受けた医学校の出身者にしか申請資格を認めない」との通告がありました。いわゆる2023年問題です。このことを、わが国でも国際的に通用する医師養成制度を確立すべきとの警鐘と受け止め、評価組織として設立されたのが「日本医学教育評価機構(JACME)」です。評価は自発的に順次実施され、JACMEが世界医学教育連盟(WFME)から国際的に通用する評価機関として認知された2017年以降は、受審大学のグローバルスタンダードに則った報告書による自己評価とJACMEによる事前書面審査および実地調査による外部評価が正式に行われるようになりました。

(※) コロナ禍のため、2024年に延長されています。

金沢大学の対応

金沢大学医学類では2015年ごろから分野別評価受審の機運が高まり、関係各位で協議がなされたとの記録が残っています。実施した大学への見学、専門家による講演会の開催を経て、評価基準に基づいた自己評価案の検討に加え、3つのポリシーの制定、臨床実習のあり方や学修成果の評価に関わる協議も開始されました。また入学試験と共用試験との相関関係など Institutional Research (IR) 活動の一端も行われ報告されています。

一方で2016年大学本部に大学情報戦略室が設置され、各種学習環境アセスメントが実施され

るようになりました。例えばアクティブラーニング(AL)のためのハード&ソフト両面にわたる課題を浮き彫りにし、PDCAサイクルを回すためのFaculty

Development/Staff Development (FD/SD) も大学教育再生加速プログラム実務委員会で実施されるようになりました。この基盤があったことで分野別認証でも必須のFD/SD活動が医学類独自でスムーズに継続でき、現在に至るALの研究や評価方法の啓発が行われています。

さらに2017年度以降は、医学類教育委員会の下に、順次「小委員会」や「ワーキンググループ(WG)」を設置して、それぞれが関連する課題を分担し、発議・上申する仕組みを構築しました。例えば教育理念や3つのポリシーについては使命策定委員会で、教育プログラムに関する事項は、カリキュラム委員会で発議し、具体案を教育委員会で審議・立案する仕組みです。同様に、診療参加型臨床実習WG(現臨床系WG)を立ち上げ、72週に拡大した診療参加型臨床実習の実現に中心的役割を果たしました。また2019年度には医学教育IR室を設置し、教学データの収集と分析に取り組み、これまで個人的努力に依存していたIR活動を組織的に行う仕組みを構築しました。

これらの組織改変と並行して2019年10月に医学教育分野別評価受審WGを立ち上げ、自己評価報告書作成の体制を整えました。すなわち主任教授全員が9領域のいずれかを担当し、責任者のリーダーシップのもと各領域毎に医学教育研究センター、学務係を中心とした実務家と何度も協議を重ね、改善不十分な項目を各委員会、WGにおろして対策を繰り返し、自己評価報告書を作成しました。その報告書も推敲を重ねて2021年10月に提出後は、実地調査当日のプレゼンと質疑応答の予行を綿密に実施し、当日を迎えました。

結果と今後に向けて

2022年1月の5日間に渡る実地調査は、コロナ感染拡大の影響のためweb会議システムでの調査となりました。質疑応答では厳しい指摘も受けましたが、後日評価基準に適合している



図 医学教育分野別評価認定証(JACME)

との最終報告を受け取ることができました(図)。ECFMGからの通告いわゆる2023年問題への適応がきっかけではありましたが、日本版評価基準に基づいて公正かつ適正に評価された結果、金沢大学では国際標準のプログラムによる医学教育が行われていると認定されたこととなります。

分野別評価を受審したことによる効果と影響は数え切れないものですが、とりわけ重要なのは次の2点だと思います。

第一に、金沢大学が国際的な基準を満たした医学教育が実施されていることを広く世界に示すことができました。特に従来までの見学型臨床実習ではなく参加型臨床実習を72週に拡大し、北陸3県を中心とした関連病院群がいわば一つの教育病院となって実施できるようになったことは金沢大学の底力を見せました。実現にあたってご尽力いただいた関係各位、そして今日も実習でご指導、ご支援いただいている関連病院の皆様にあらためて感謝申し上げます。

第二に、医学教育をより良いものしていくための仕組みがより強固になりました。分野別評価を通して教育への関心が高まっただけでなく、教育プログラムを体系的に策定し、実施、管理、評価する仕組みが出来上がったこと、教育委員会やカリキュラム評価委員会などにも学生代表が委員として参画することになったことも大きな成果です。今後毎年さらなる改善向けの進捗を内外に発信、報告することが求められます。

今回の認定は、これまで医学類・附属病院教職員、大学本部、関連病院職員と学生、保護者が関係者とともに実践してきた教育と認証に向けた取り組みの成果の賜物です。ここにあらためて全ての関係者に感謝申し上げるとともに、この認定はスタートであり、これをきっかけとして、本学医学教育プログラムの弛まぬ改善を続けていくことをお約束し、医学教育分野別評価受審の報告とさせていただきます。

寄附講座の紹介

地域呼吸器症候学講座

地域呼吸器症候学講座は、地域に特化した呼吸器病学の構築と呼吸器診療連携体制の強化を目的として、2011年12月に設立されました。呼吸器疾患は、感染症、腫瘍性疾患、アレルギー性・膠原病関連疾患、間質性肺疾患、血管性疾患など領域が多岐に渡り、その発生頻度には地域差がみられます。世界共通の医療の進歩に加えて、地域の特性を把握することは、最適な医療を提供する上で必要不可欠です。

これまで金沢大学附属病院、恵寿総合

病院(能登地方)をはじめとする北陸の各基幹病院が協力して症例を集積し、臨床研究を推進してきました。そして、進行肺癌に対する免疫チェックポイント阻害薬の有害事象と予後への影響を検討した観察研究(Clin Lung Cancer, 2020& 2022)や、強皮症関連間質性肺炎の気管支肺胞洗浄液のバイオマーカー探索研究(J Thorac Dis, 2021)など、数多くの成果を上げています。また、呼吸器疾患は難病が多く、病態解明と治療法の開発を目指した基礎研究にも力を入れてい

ます。当講座では、肺の主要な免疫担当細胞であるマクロファージの働きに注目し、肺障害・修復・再生メカニズムの解明に取り組んでいます。本研究を基盤として、肺の修復・再生を促進する新たな治療法や疾病の予防法の開発を目指しています。

人口の高齢化やコロナ禍において、呼吸器疾患の社会的重要性は高まっています。呼吸器病学に主眼を置いたトランスレーショナル研究と、地域に特化した呼吸器診療を発展させることを目指して、社会貢献につながるよう精一杯取り組んでまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(渡辺 知志：記)

先進運動器医療創成講座

本講座は2009年10月1日に創設され、現在山本憲男が特任教授、五十嵐健太郎が特任助教として在籍し、先進的な運動器医療の研究・診療に取り組んでいます。

これまで「原発性あるいは転移性骨軟部腫瘍に対する革新的な治療法の確立」、「簡便な新規骨粗鬆症スクリーニング法の確立」、「ロボット工学技術を応用した変形性膝関節症に対する先端的手術療法の確立」をはじめとした、多くのテーマに取り組んできました。

骨軟部腫瘍分野においては、2018年

度の診療報酬改定で、「四肢・躯幹軟部悪性腫瘍手術および骨悪性腫瘍手術における超音波凝固切開装置等加算」の認定に、さらに2020年度の診療報酬改定で、我々が開発を行ってきた液体窒素処理自家腫瘍骨を含めた「骨悪性腫瘍手術における処理骨再建加算」の認定に、大きな貢献を果たすことができました。また「骨軟部肉腫に対する患者由来腫瘍同所移植モデルを用いた新規治療および個別化医療の開発」で、本年度の金沢市医師会金沢医学館記念医学賞を受賞いたしました。一方骨粗鬆症分野においては、私

たちが新しく提案したFRAXを用いた骨粗鬆症スクリーニング法をベースに取り入れて、現在我が国における骨粗鬆症検診の見直しが進められています。

本寄附講座は、創設以来すでに10年以上が経過していますが、これだけ長期間にわたり本講座を運営できているのは、多くの方々の運動器医療発展への十分なおご理解と多大なご支援があるからこそである、と深く感謝しております。今後ともオリジナリティのある新規運動器医療技術の発展に貢献できるよう、精一杯取り組んでいきたいと考えておりますので、引き続きご指導ご鞭撻いただけますと幸いです。

(山本 憲男：記)

地域未来医療整形外科科学講座

2018年10月1日、地域医療や高齢者運動器疾患を対象とした基礎研究および臨床研究、診療体制の充実のために、本講座を設立させていただきました。本寄附講座の研究では、高齢化社会の運動器疾患に対する再生医療の発展や、骨粗鬆症関連疾患に対するより安全で低侵襲な治療の進歩を目指しています。また本講座での教育を通して、将来の地域運動器医療を担う人材、最先端の運動器医療の開発に携わる人材が育つことが期待されます。

骨粗鬆症に関しては、骨粗鬆性脊椎に

関する生体力学解析および低侵襲脊椎治療法の開発と臨床応用を行っています。椎体骨折に伴う脊柱後弯変形が、他の脊椎にどのような力学的影響を及ぼし、新たな椎体骨折が生じ易くなるのかを三次元有限要素解析を用いて研究しています。また脊椎手術の低侵襲化を目的として、内視鏡手術や経皮的脊椎固定などに続く新たな手術器具の開発や、高齢者においても術後回復が早い治療法の開発を進めています。

変形性関節症の既存の治療は、鎮痛剤やリハビリなどの保存療法か、骨切りや

人工関節の手術がありますが、軟骨を再生させる根本的な治療法は確立されていません。我々はこれまで、脂肪由来幹細胞から神経や骨、靭帯、皮膚などの再生に関する研究報告を行っており、さらに広範な骨欠損、軟骨欠損に対し、研究を進めています。独自で開発した幹細胞シートやスフェロイドなどを用い、ある程度の骨再生が得られることは確認されました。スフェロイドを重層化した構造体を用いることや、リン酸カルシウムやチタンなどの足場とスフェロイド構造体の融合などで、骨再生に最も優れ、臨床応用可能な幹細胞移植方法の確立を目指しています。

(林 克洋：記)

認知症先制医学講座

認知症に対する先制医療を実現するための調査研究、研究開発の推進を目的として2019年4月に設立されました。現在小松潤史が特任准教授、柴田修太郎が特任助教として在籍しています。本講座では、脳神経内科の小野賢二郎教授のご指導のもと、認知機能低下予測・認知症疾患早期診断のツールとして特に脳磁図(MEG)に注目し、研究を行っています。MEGは撮影に際し被曝などの人体への侵襲性がなく、スクリーニングとして行

う検査として非常に優れています。脳神経内科学分野で以前より推進している、石川県七尾市中島町を対象とした認知症の地域コホート研究(なかじまプロジェクト)を基盤として研究を進めております。これまでの成果として、大脳皮質レベルでの定量的解析を可能とするMEGデータ解析により安静閉眼時および開眼時のMEG所見から高い精度で早期アルツハイマー病(AD)を検出できることを見出し(Ikeda Y, Sci Rep, 2020)、さ

らに、軽度認知機能障害(MCI)レベルのAD検出に光刺激時のMEG所見が有用であることを明らかにしました(Noguchi-Shinohara M et al, PLoS ONE, 2021)。

今後としては、なかじまプロジェクト研究に参加する非認知症地域住民(認知機能正常あるいはMCI)を対象としたMEG所見の縦断的な検討や、MEGを用いたAD以外の認知症及びMCIの鑑別、さらにはプレクリニカル段階でのMEGによる疾患検出を可能にすることを目指し、研究を進める予定です。

(小松 潤史：記)

寄附講座の紹介

機能画像人工知能学講座

機能画像人工知能学講座は2019年4月に設立されました。人工知能(AI)のテクノロジーは私たちの社会の中でも急速に進歩している領域であり医療も例外ではありません。本講座の成果から2つの適用を紹介します。

1) 多変量データの解析への応用: AIの一領域である機械学習は多変量が関与する統計的解析に応用できます。従来の診断モデルは、多変量統計解析の延長線上にあり数式で表されるようなモデルの場合もあれば、また典型的にはIf-Then

の形式で表される論理アルゴリズムを利用します。一方、機械学習はrule-basedの構造をもたず、入力と出力の組み合わせを与えることにより最適アルゴリズムを行列計算等から導きます。従って、変数間の相互関係がルール化できない多変量の解析にも適しています。私たちは機械学習を慢性心不全における死亡原因の推定に適用し、突然死の予測法としても有望な結果を得ています(J Nucl Cardiol, 2022掲載)。

2) 画像の診断分類への応用: AIによ

る診断分類のひとつとして、脳の線条体のドパミントランスポータ画像を自動的に診断することにも成功しました。尾状核と被殻の集積はパーキンソン病・症候群やレヴィー小体病で特有のパターンを示します。画像を入力するだけで診断可能で、従来の関心領域による定量に勝る精度を得ることができました(Ann Nucl Med, 2022掲載)。

この他、新しい心臓や脳の超高分解能SPECTや動態SPECTによる定量、心アミロイドーシス、心サルコイドーシス、中性脂肪蓄積心血管症など、さまざまな領域で研究を行っており新しい診断技術や予後予測法を目指しています。

(中嶋 憲一: 記)

情報医学開発講座

大学を退職すると、内科・消化器の領域であればお役に立てるかもしれないが、臨床をずっとしてこられた先生ほどには及ばないと考えていた。医学部を卒業後、何に情熱をもって長い時間を費やしたかを考えると、臨床研究と医師教育を含む地域医療であった。この講座では、情報を用いた新しい診断学を作ること、そして、情報社会に適した医療の研究を行っている。学生の頃、「内科診断学」の授業は15代の第一内科教授であった武内重五郎先生の教科書を使用してお

り、国内の多くの学生もそうだった。そして、教授に就任した時、この本を改訂してはどうかと勧められた。しかし、問診と身体所見に基づく診断法は、ある意味で確立していた。そこで、新しい診断学は異なった方法を用いる必要があると考え、長らく、遺伝子を中心に多数の情報を用いる診断法の研究に携わってきた。幸いにも発明賞や3つの大臣表彰を含む業績となり、市場で使用された。そのうちの一つは診断薬として製造承認もいただいた。この研究をさらに展開し、多数

の情報を用いた新しい「診断学」の誕生に何らかの貢献ができればと考えて研究をしている。また、関連病院とともに医師を教育し、県の医療審議会会長を16年間務めるなど、地域医療に多くの時間を費やした。急速に展開する情報社会において、患者・医療関係者のためになる地域医療がどのようなものであるかの研究を継続している。このような講座にご寄附をいただいたことに感謝している。特任准教授を2名、博士研究員2名、学士研究員2名の講座であるが、金沢大学・同窓会に何らかの貢献ができれば願っている。(https://www.infomed.jp/)

(金子 周一: 記)

包括的IgG4関連免疫学講座

IgG4関連疾患(IgG4-RD)は、原因不明の全身性炎症性疾患で、血清IgG4上昇、組織のIgG4陽性形質細胞浸潤を特徴とする。金沢大学は本疾患の疾患概念の確立と臨床的特徴の解明に大きな役割を果たしてきた。当講座は本疾患の病態解明、バイオマーカー探索、治療薬開発を目的として、2020年設立された。

IgG4-RDにはいくつかの自己抗体が提唱されている。しかし、複数の施設で追試され確認された自己抗原・抗体は存在しない。活動期には末梢血中

にIgG4を産生する形質芽球(plasmablast:PB)がオリゴクローナルに増加することが明らかにされてきた。この結果より血中に何らかの抗原を認識するB細胞クローンが存在する可能性が示唆される。そこで、患者末梢PBより、代表的クローンからモノクローナル抗体を作成した。次にそれぞれの対応抗原を同定するため、蛋白質アレイを用いて抗原候補を探索し、疾患に特異的自己抗体の発見につながるか検討中である。加えて最近では、本疾患において、補体と糖鎖異常

に注目した研究を進めている。

また、IgG4分子研究の臨床応用として、食物アレルギーの経口免疫療法がある。この治療によるアレルゲンへの耐性の獲得には患者血中に抗原に対するIgG4が産生されることが重要である。食物抗原を認識するIgG4をシングルセルレベルで解析する方法を用いて、経口免疫療法成功者よりIgEを抑制可能なIgG4クローンの同定を目指している。現在までに候補となる抗カゼインIgG4抗体を20個以上作製した。これらを用いて治療薬開発に取り組んでいる(令和2年度AMED免疫アレルギー疾患実用化研究事業)。

(伊藤 清亮：記)

地域連携呼吸器内科学講座

呼吸は人間の生命維持のうえで欠かすことができない機能であり、気道および肺胞は常に外界と接している点で他の臓器と異なる。このため呼吸器系において生じる疾患に係る治療には感染症、アレルギー、自己免疫疾患、悪性腫瘍など多岐にわたる専門的な知識と技術が必要とされる。一方で呼吸器疾患に関する国民の認知度は低く、啓発すべき専門医の不足が一因と判断される。また、肺炎、肺癌をはじめとする悪性新生物、COPD

は日本人の死亡順位の上位にあり、専門医の増加、専門医個々のスキルアップが北陸地区全体の医療レベルを向上させて、ひいては呼吸器疾患による死亡率低下に寄与することは言うまでもない。

金沢大学呼吸器内科ではこれらに関する診療、研究、教育を行い、石川県のみならず北陸三県に広く呼吸器専門医を派遣してきた。しかしいまだ充足しているとは言い難く、南加賀地区には呼吸器内科専門医を必要としている患者が多いこ

とから、さらに多数の専門医を育成することは急務である。そのため新たに本寄附講座を立ち上げ、common disease(※日常的に高頻度で遭遇する疾患、有病率の高い疾患)に対する専門医としての教育、希少疾患に対する病因の解明と治療法の開発を行う。特に高齢化する南加賀地区において標準的呼吸器診療を行い、広く国民の福祉と健康に貢献し、地域医療を担う人材の育成を目標とする。

現在は、特任准教授1名と特任助教1名の講座であるが、金沢大学・同窓会に何らかの貢献ができるよう頑張りたい。

(原 丈介：記)

病院紹介

公立河北中央病院



当院の歩み

昭和26年8月に河北郡国民健康保険団体連合会により開設され、昭和34年3月に津幡町に移管となり津幡町国民健康保険直営河北中央病院となりました。令和3年4月に公立河北中央病院と改称いたしました。

現在の診療科数は13科、常勤医は内科、整形外科、眼科の3科で、一般病床60床うち25床を地域包括ケア病床として運営しています。令和2年には健診センターを設置し、健診受診者と外来患者の動線を分けました。

当院の現状

当院は小規模ではありますが河北郡市唯一の自治体病院として、患者さんと共にある医療・介護・生活支援を提供することにより、切れ目のない地域完結型医療を担い、地域のまちづくりに貢献することを目指しています。

これまでは地域で高齢者を支える基幹

病院としての役割を果たしてまいりましたが、この2年間は急性期病院としての役割強化および消化器内視鏡治療の充実 に注力しています。急性期診療については、現在職員一丸となり取り組んでいるところですが、既に救急車の搬入台数はこの1年間で倍増しています。消化器診療に関しては、令和3年に内視鏡システムおよびスコープを最新型の機器に更新し、より精度の高い検査、高度な内視鏡治療にも対応が可能となりました。新たに、早期がん(食道・胃・大腸)に対する内視鏡的粘膜下層剥離術や胆膵疾患に対する内視鏡的胆管膵管造影関連手技に伴う治療を導入しましたが、治療数が飛躍的に増加しています。最近、当院で内視鏡治療を行った症例がGastroenterology誌に掲載されました。日常臨床において新たに得られた知見を世界に発信しています。

医療の質の向上を目指して病棟では毎日多職種カンファレンスを行い、多職種協働によるチーム医療を実践しています。

また、高度化・専門化する医療に応えるために、資格取得を積極的に支援しており、各種認定看護師が続々と誕生しています。

新型コロナウイルス感染症に対しては、いち早く発熱外来・ドライブスルーPCR検査施設を開設しました。当院は重点医療機関としてこれまでに206名の入院診療を行っています。

今後の展望

これからも地域包括ケアシステムを担う中核病院としての責任を果たしていくためには、常勤医師ならびに薬剤師の確保が喫緊の課題です。当院では常勤医師および外来診療、当直を含めて金沢大学のお力をお借りして運営できております。十全同窓会会員の皆さまにおかれましては、今後ともご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

(院長 淵崎宇一郎：記)

概要

公立河北中央病院	
所在地	石川県河北郡津幡町字津幡口51番地2
病院長	淵崎宇一郎
病床数	60床(一般病床)
診療科数	13

沿革

昭和26年 8月	河北郡国民健康保険団体連合会により河北中央病院を開設
昭和27年 4月	河北郡伝染病予防組合により伝染病棟併設
昭和34年 3月	津幡町へ移管され、津幡町国民健康保険直営河北中央病院に改称
昭和39年12月	救急病院に指定
昭和59年 3月	伝染病棟の廃止
平成 4年 3月	新病院改築
平成26年 4月	一般病床80床から60床に変更
令和 2年 4月	発熱外来・ドライブスルーPCR検査施設開設
令和 2年10月	石川県発熱患者等診療・検査医療機関、新型コロナウイルス感染症重点医療機関に指定
令和 3年 4月	公立河北中央病院に改称

高岡市民病院

当院の歩み

当院は昭和26年10月に「健康保険高岡市民病院」として開設されました。昭和40年3月に現在の「高岡市民病院」に改称され、平成12年3月に新病院に改築された後、現在に至っています。JR高岡駅から約2.5km北部に位置し、近くには風光明媚な高岡古城公園、高岡城址がある市街地に位置します。高岡市、高岡医療圏における急性期病院として機能しており、災害拠点病院、臨床研修指定病院、地域医療支援病院、富山県がん診療連携拠点病院に指定されています。

当院の現状

当院は高岡医療圏内における急性期病院として、救急医療、がん医療、循環器疾患、脳血管障害、周産期医療等の急性期医療を行うとともに、自治体病院として、精神科疾患、認知症対策、特殊感染症対策、災害医療など民間病院では行えない政策的医療にも携わってきました。

救急医療に関しては、厚生連高岡病院、済生会高岡病院との3病院で二次救急指定医療機関を構成しています。年間約2800台の救急車を受け入れており、高岡医療圏における救急医療の拠点

病院の一つとして重要な役割を担っています。がん医療に関しては、富山県がん診療連携拠点病院の指定を受け、消化器内科、消化器外科、乳腺外科、泌尿器科、婦人科、放射線科等において積極的ながん診療を行っています。令和元年12月からは内視鏡下手術支援ロボットを導入し、泌尿器科、婦人科、消化器外科にてロボット手術を行っています。

周産期医療では、2022年3月に産科病棟を改築し、個室を増やしたウィメンズ病棟を新たに開設することで、妊産婦が快適な入院生活が送れるようにしました。また今年度から麻酔科の協力を受け無痛分娩を開始し、産婦の満足度を高め、出生数の増加に繋げています。

政策的医療においては、平成29年10月に認知症疾患医療センターを開設し、医療圏内の認知症疾患患者さんへの支援、治療、そして認知症全般に関する情報発信を行っています。また当院は高岡医療圏における感染症指定医療機関であり、現在の新型コロナウイルス感染症に関し、医療圏におけるリーダーとしての役割を果たしてきました。災害医療対策としてはDMATを2隊有し、日々訓練を行いながら有事に備えています。

今後の課題

高岡医療圏においては、少子高齢化、核家族化が進み、高齢者世帯が増増してきました。こうした現状から、急性期以後の医療に加え、生活支援等を一体化して提供する地域包括ケアシステムの構築が急務であります。当院は急性期病棟のみを有する医療機関であり、急性期医療が終了した後、周辺の地域包括ケア病棟や回復期リハビリテーション病棟を有する医療機関と連携を図ることを積極的に行ってきました。今後も高岡医療圏の自治体病院、中核病院として、本システムのリーダー的役割を果たしていきたいと考えます。

金沢大学に入局する医師数の減少とともに、当院においても医師不足、既存の診療科の撤退が起こっています。高岡医療圏における急性期医療を堅持するためにも、医師の供給に関し、金沢大学のご協力を強く希望いたします。

今後とも十全同窓会の皆さまのご理解、ご指導、ご支援を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

(病院長 藪下 和久：記)

概要

高岡市民病院
所在地 富山県高岡市宝町4番1号
病院長 藪下 和久
病床数 373床(一般病床305床、結核病床12床、感染病床6床、精神病床50床)
診療科数 24

沿革

昭和26年10月 健康保険高岡市民病院として開設
昭和40年3月 高岡市民病院に改称
平成8年11月 災害拠点病院に指定
平成16年3月 臨床研修指定病院に指定
平成19年1月 地域がん診療連携拠点病院に指定
令和元年6月 地域医療支援病院に承認
令和3年4月 富山県がん診療連携拠点病院に指定

教室だより

細菌学

研究

細菌と宿主との相互作用について：当研究室では細菌と宿主(ヒト)の相互作用を研究対象としています。細菌が産生するタンパク質毒素の多くは、微量で宿主に致死など大きな影響を与えるという特徴を持ちます。細菌毒素がこのような強力な作用を発揮できる理由の一つとして一般的に考えられているのは、多くの細菌毒素が宿主の機能分子に特異的に作用する酵素であるということです。もう一つ重要な細菌毒素の特質として、作用する基質に効率よくターゲティングする機構すなわち巧妙な輸送機構をもつ場合が多いことが挙げられます。その輸送機構は、もともと細胞が基本的・生理的にもっている膜輸送系やオルガネラの機能をうまく利用している場合が多いことがわかってきました。従って細菌毒素の輸送経路の研究は、毒素による病態発現機構の解明という意義に加えて、従来知られていなかった宿主細胞の基本的で重要なしくみを明らかにできる可能性も秘めています。このような研究は外来病原因子の侵入に対する宿主の防御システムを理解し制御する上でも重要です。当研究室は、腸管上皮細胞バリアを巧妙に通過してボツリヌス食中毒を引き起こすボツリヌス神経毒素複合体を研究対象として、本毒素の構造と機能の分子レベルの解析を



行っています。我々はさらに、ボツリヌス菌感染という複雑な系の解析にも取り組んでいます。ボツリヌス菌はハチミツなどに含まれる芽胞によって乳児に感染することが知られていますが、健常な成人には感染しません。成人の持つ腸内細菌叢がボツリヌス菌の感染防御に重要だと考えられていますが、その具体的なメカニズムはわかっていません。この謎を明らかにすべく、宿主-腸内細菌-ボツリヌス菌の相互作用をマウスモデルを中心に解析しています。

クロストリジウム属菌による疾病の治療薬の開発：国立感染症研究所などとの連携により、有効で安全な治療用抗体(ボツリヌス神経毒素ヒト型モノクローナル抗体)などを開発しています。

細菌由来成分を用いた新規な有用物質の開発：E-cadherinに特異的に結合する活性を持つことが明らかになったボツリヌスHA(hemagglutinin)は、再生医療に用いる細胞の培養・加工に有用であることが、大阪大学工学部との連携により明らかになってきました。このように、基礎研究で得られた知見を役に立つものづくりに繋げる応用研究を展開しています。

教育

医学類、医薬科学類2年生から3年生にかけての「細菌感染学」の講義・実習を担当しております。令和3年度は特別講義として、中村信一名誉教授に「細菌との共存」、富士見高原病院の唐澤忠宏先生(当教室の同門であり元本学保健学科教授)に「臨床から見た細菌学」をご講義頂きました。また、1年生の「チュートリアル教育」、3年生の「基礎研究室配属」(4名)を分担、MRTプログラムにも参加しています。大学院に関しては、所属学生に日々研究指導を行うとともに、月1~2回各自の研究成果を発表し検討する機会を設けることで研究の質を高めています。また、大学院生も日本細菌学会総会や支部会等の学会に参加し、研究内容を発表する機会を設けています。

おわりに

末筆となりましたが、今後も教職員一同、医学教育・研究のために更なる研鑽を続けていく所存です。今後とも、十全同窓会の諸先生方のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(藤永由佳子：記)

スタッフ

教授	藤永由佳子
准教授	松村 拓大
助教	小林 伸英
大学院生	3名
技術補佐員	2名
MRT学生	3名

研究分野の沿革

本学で細菌学の名前が最初に現れるのは明治45年、教授の上田計二に始まります。これまで児玉豊治郎教授、下條久馬一教授、谷友次教授、西田尚紀教授のもと発展してきました。昭和61年に中村信一が第六代教授に就任。中村教授が平成16年に金沢大学理事・副学長に就任した後(平成20年国立大学法人金沢大学長に就任)、同年に第七代教授として清水徹が金沢大学大学院医学研究科・細菌感染症制御学講座の教授に就任しました。清水教授が平成26年に急逝した後、平成27年に大阪大学微生物病研究所より第八代教授として藤永由佳子が赴任し、平成28年4月より細菌学教室と改称し現在に至っています。

脳・脊髄機能制御学

診療

脳神経外科医療は大きな変化を遂げています。従来からの手術顕微鏡を用いた開頭手術、脳卒中に対する脳血管内治療、頭蓋底・脳室内腫瘍に対する神経内視鏡手術に加え、神経系腫瘍に対する外視鏡手術が導入され、モニター手術が多くなりました。これらの手術手法の進歩は低侵襲治療を可能にしています。また、覚醒下手術や術中電気モニタリングにより、安全性が向上しました。

特に、脳実質内腫瘍に対する覚醒下手術については、当教室では社会生活に必要な高次脳機能を温存する手法で日本を先導しています。これまで多くの手術見学者を受け入れ、2023年7月には第21回日本awake surgery学会を金沢で開催予定です。

急性期脳梗塞に対する血栓回収療法の確立により、治療成績が劇的に改善しました。循環器病対策基本法が制定され、全国どこでもこの治療が受けられるよう日本全体の医療整備が進んでいます。現時点で石川県ではまだ少ない脳血管内治療専門医の育成が喫緊の課題となっています。

教育

医学類教育では、脳神経外科疾患について各専門家が基礎的知識を講義します。5年生時の臨床実習では、朝カンファレンスの参加から始まり、午前には手術・外来見学、午後には各種疾患のミニレクチャーを行います。また、学生各自が一人の入院患者を受け持ち、診断と治療を能動的に考えるよ



う促します。平日7日間の短期間ではありますが、脳神経外科医療をできるだけ知ってもらいたいと考えています。

学生自身が希望科を選択する6年生時のインターンでは、血管内手術シミュレーションや卓上顕微鏡を使用した血管吻合など手技を経験します。教室に溶け込んで、若手医師との交流から自身の将来像をイメージしてもらいます。

卒後教育では、初めから脳神経外科医を志す場合は、専門コースの選択を勧めています。卒後初期の臨床経験は重要と捉えており、臨床研修の後で、研究活動を開始します。指導医が付いて、独創的な研究で学位を取得します。卒後7年日以降に専門医試験を受けて、学会認定専門医となります。その後、サブスペシャリティを自らが考え、それぞれの夢を設定して邁進します。その過程で国内・国外留学を奨励しています。

次世代脳神経外科医育成のための若手医師の教育は、スタッフの最重要責務です。脳神経外科医の生涯教育を目的とする第40回日本脳神経外科コンgres総会を2020年に金沢で開催しました。当該領域で初のweb併催の学会の実現となり、新しい学会形式の先鞭をつけました。

研究

脳神経外科医療は日進月歩ですが、依然として難治疾患も多くあります。大学は未来の医療を創造する場であり、当教室は研究活動

を重要視しています。2022年7月には第22回日本分子脳神経外科学会を担当しました。

基礎研究としては、プロテオミクスによる悪性脳腫瘍の血液バイオマーカーの探索や、既存薬の中から抗腫瘍効果を有する薬剤を抽出する研究、悪性脳腫瘍細胞の脳内浸潤機構を解明する研究を継続的に行っています。また、覚醒下手術で得られる脳機能局在の知見を活用した、神経ネットワーク研究により、脳科学への貢献を目指しています。

未破裂脳動脈瘤に流体力学を応用し、コイル塞栓術後の再発予測を行うことで、実臨床で再発率を低下させています。また、内視鏡症例の画像を用いた臨床解析から新知見を報告しています。

各研究で異なる視点を持った共同研究者を得て、融合研究を進めています。研究には資金と人材が必要です。外部資金を鋭意獲得し、留学生を広く受け入れています。

おわりに

教室のモットーは「一緒に働ける縁を大切に、百年後も輝ける仕事をしよう」です。そして目標は「北陸を脳神経外科医療最先端地域にし、脳神経外科疾患に対する医療については世界一優れた医療圏にする」です。教室員の夢を実現する助けをすることが教室のミッションです。今後とも十全同窓会の皆さまのご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

(中田 光俊：記)

スタッフ

教授 中田 光俊
 講師 見崎 孝一、木下 雅史、上出 智也
 助教 笹川 泰生、佐野 宏樹(集中治療部)、
 田中 慎吾、筒井 泰史、玉井 翔、
 宇野 豪洋(救急部)
 博士研究員1名、医員1名、医学博士課程19名、
 留学生5名(中国2人、ロシア3人)、
 秘書5名、技術補佐員1名

研究分野の沿革

金沢大学医薬保健研究域医学系 脳・脊髄機能制御学(旧名称：金沢大学医学部脳神経外科)は、1964年に脳神経外科診療科が開設された後に、1966年に第一外科から脳神経外科学講座が独立しました。初代教授として山本信二郎、1988年から山下純宏、2005年から濱田潤一郎、2014年から中田光俊が受け継ぎました。講座名は2001年、金沢大学大学院医学系研究科・脳医学専攻・脳病態医学講座・脳機能制御学となり、改組に伴い2008年に金沢大学医薬保健研究域医学系 脳・脊髄機能制御学となりました。

十全学術行脚 第35回 | 順天堂大学 |



順天堂大学

1838年佐藤泰然が江戸薬研堀に蘭方医学塾(和田塾)を開いたのが順天堂の始まりです。学校法人順天堂大学は現在6学部(医学部、保健看護学部、医療看護学部、保健医療学部、スポーツ健康科学部、国際教養学部)を要し、本郷・御茶ノ水キャンパス、浦安キャンパス、三島キャンパス、さくらキャンパスに各学部が存在します。現在、新たに建設中の日の出キャンパスでは、健康データサイエンス部、ヘルスケア産業部、薬学部、医療科学部が新設される予定です。附属病院は順天堂医院、静岡病院、浦安病院、順天堂越谷病院、順天堂東京江東高齢者医療センター、練馬病院の6病院があり、さらに2028年には埼玉県に埼玉国際先進医療センター(800床)が開院予定です。将来は収容定員12,000人という大規模の総合医療大学を目標としています。現在、金沢大学出身の医師は全附属病院を含めて5名勤務しています。出身校、国籍、性による差別なく、優秀な人材を求め活躍の機会を与えるという「三無主義」の学風掲げますので、金沢大学の卒業生もぜひ順天堂大学の新たなスタッフとして加わっていただければと思います。

(石崎 陽一：記)

1. 石崎 陽一 院長補佐、教授

(昭和60年卒業)

順天堂大学医学部附属浦安病院

消化器・一般外科



私は1985年に金沢大学を卒業後、東京大学第二外科に入局しました。胆道グループに所属し、内視鏡外科手術の黎明期にご活躍された故伊藤徹先生に師事し、学位を取得しました。関連病院である国保旭中央病院、都立広尾病院、東京労災病院で臨床の研鑽を積んだ後、2004年から順天堂医院・肝胆膵外科に所属し、現在、三井記念病院院長の川崎誠治先生のもとで主に肝移植を中心に、肝胆膵外科領域の手術を行ってまいりました。

2018年から順天堂大学医学部附属浦安病院へ異動しました。浦安病院は東京ディズニーランドに隣接し、夜8時から始まる打ち上げ花火を見るのが日課となっています。千葉県・東葛地区の中核病院であり、病床数は785床と金沢大学病院に匹敵する規模の病院です。消化器・一般外科は全国的にも腹腔鏡手術の先駆的な存在として有

名で、消化管の手術はほぼ100%腹腔鏡下、ロボット支援下で行っています。日本内視鏡外科学会・技術認定医7名を有し、質の高い手術を患者様に提供しています。私の就任後、次第に肝胆膵外科領域の症例が増加し、2020年に念願の肝胆膵外科高度技能専門医修練施設認定を取得しました。順天堂医院時代から現在まで肝切除約2,000例、膵頭十二指腸切除約500例を経験し、出血量、合併症の少ない手術を目標とし、現在も老骨に鞭を打って手術を行っています。早く次世代の外科医が技術を習得し、私が手術に参加しなくてもよい時代がくることを願っています。

2. 八田耕太郎 教授

(昭和62年卒業)

順天堂大学医学部附属練馬病院

メンタルクリニック



私が預かっている医学部附属練馬病院(490床)のメンタルクリニック(精神科)は、精神科床がないため精神科リエゾン診療に注力しています。本院から異動した

2009年から入院患者の精神科リエゾン新患は右肩上がりに増加し続け、2021年度はほぼ1000件に達しました。高齢化によるせん妄の増加と活発な救急診療、そしてこの病院がわれわれ精神科医をあてにしてくれる結果の数字だと思います。そのような信頼関係の中、どの科も躊躇なく手術や急性疾患のために精神疾患併存患者を入院させ、良い文化が醸成されていると感じます。区西北部は周囲の精神医療環境が都内随一で、それを仕切っている方が私のかつての都立病院仲間ということもあって、その円滑な医療連携も有利に働いています。

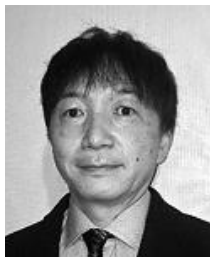
当院は教育病院としても人気が高く、研修医は1学年34名、2学年で68名に上ります。精神科は必修であるため毎月2名程度が回ってきて、M5学生も2名きますので、新患のファーストタッチやカルテ記載の指導、PBCなど慌ただしくやっています。

研究面では、豊富なせん妄症例を背景に、その薬物的な予防・治療介入に取り組んでいます。日本総合病院精神医学会の同志と多機関共同研究グループを組織し、これまでJAMA PsychiatryやJAMAなどに成果を報告しています。また、東京都立墨東病院時代に始めた統合失調症を中心とした精神科救急の臨床研究も、日本精神科救急学会の多機関共同研究として継続しています。

3. 大久保裕直 先任准教授

(平成7年卒業)

順天堂大学医学部附属練馬病院
消化器内科



小生は1995年の卒業後、東京医科歯科大学医学放射線科に入局し、国保旭中央病院への出向を経て、1999年に順天堂大学医学部消化器内科に入局しました。2005年からは順天堂大学医学部附属練馬病院消化器内科の立ち上げスタッフとして赴任し、現在同消化器内科科長を務めております。順天堂大学練馬病院は490床と中規模な病院であり、練馬区唯一の大学病院としての地域医療への貢献、高度かつ先進的な医療の

提供を意識した消化器診療を行っています。

一方、小生は2013年から3年間、自治医科大学医学部臨床薬理学部門藤村昭夫教授(本学昭和53年卒業)の元で、客員研究員として研鑽を積む機会をいただきました。また2016年から金沢大学医薬保健研究域医学系細胞分子機能学非常勤講師として、医学系の学生に講義する機会を安藤仁教授(平成7年卒業)からいただいております。さらに、同教室と肝疾患の臨床薬理に関する共同研究を精力的に進めております。

以上のように、特に学術面では十全同窓の先生方に変なお世話になっている身であり、今後も臨床・教育・研究に邁進していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

4. 中永 寛 助手

(平成24年卒業)

順天堂大学医学部附属順天堂医院
心臓血管外科



卒業後、東京の三井記念病院で外科全般の研修を行い、2017年より東京ベイ・浦安市川医療センターで田端実先生に師事し心臓血管外科研修を開始しました。その後虎の門病院を経て、田端実先生の順天堂大学心臓血管外科主任教授就任に当たりお誘いいただき、2022年1月より順天堂大学に勤務しております。

当科は上皇陛下の執刀医としても有名な前任の天野篤先生が築き上げてきたチームに加え、低侵襲心臓手術のパイオニアである田端実先生が着任したことでより多くの患者さんのニーズに応えるべく日々診療を行なっています。これまで行なってきた治療に加え、数センチの切開で行う内視鏡下の低侵襲心臓手術(MICS)を積極的に行い術後の早期社会復帰を可能としています。また経カテーテルの大動脈弁置換術(TAVI)などのカテーテル治療も行うことで幅広い選択肢から最も適切な治療を提供しています。一方で低侵襲治療では行えない複雑高難度手術にも重点的に取り組んでおり、さ

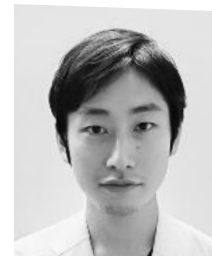
らに重症心不全に対する心筋再生治療やロボット心臓手術など、新しい手術技術や治療法の創意工夫への取り組みも進めています。

私自身も一般的な成人心臓血管外科手術に加えMICSやカテーテル治療にも注力しています。先日は若輩ながらも日本低侵襲心臓手術学会(J-MICS)の幹事にも就任させていただくこととなりました。今後ともより一層精進してまいりますので、十全同窓会の先生方におかれましてはご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

5. 生駒 一平 大学院生

(平成30年卒業)

順天堂大学医学部附属浦安病院
消化器内科



十全医学会の先生方におかれましては、日々ご活躍のこととお慶び申し上げます。2018年に卒業しました生駒一平と申します。現在順天堂大学医学部附属浦安病院・消化器内科に勤務しております。今回、同院消化器・一般外科石崎陽一先生より同窓会誌に寄稿するという機会を与えていただきまして誠にありがとうございます。

卒後の近況といたしましては、2018年3月に金沢大学を卒業後、順天堂大学医学部附属練馬病院で2年間臨床研修を行いました。右も左もわからない状況から始まり、兎に角我武者羅に駆け抜けた2年間でありました。幸運にもその間、同門でいらっしゃる八田耕太郎先生、大久保裕直先生にご指導を賜り、当時は幸いコロナ禍でもなかったため飲み会に誘っていただいたこともいい思い出として残っております。その後順天堂大学医学部附属順天堂医院の消化器内科に入局し、現在消化器内科医として3年目のキャリアを歩んでおります。今後は胆膵領域を専門として大学院にも入学し、より一層の努力をしていく所存です。

大学時代の楽しい思い出の多い金沢の地に機会があれば再訪したいと思います。末筆ではございますが、皆さまの益々のご発展をお祈り申し上げます。

金沢から世界へ発信

グリケーション研究から広がる世界

金沢大学医薬保健研究域医学系血管分子生物学

山本 靖彦

(平成4年卒業)

研究の背景と歴史

これまで本研究室(旧生化学第二～血管分子生物学研究分野)では、山本博名誉教授(現公立小松大学長)時代から、生活習慣病、がん、神経疾患、炎症等の医学生物学的にも重要な課題に取り組んできました。なかでも、糖尿病の病態研究や、糖尿病合併症との関連が深い血管の恒常性維持と破綻のメカニズムについての研究を行ってきました。その切り口として注力してきたのが、グリケーション反応とその終末糖化産物(advanced glycation end-products, AGEs)、そして、その受容体として知られているパターン認識受容体RAGE (receptor for AGEs)の役割の解明ということになります。グリケーション(糖化)反応とは、一般的には、還元糖とタンパク質のアミノ基が非酵素的に反応することを初期反応とし、最終的にAGEsの生成に至るまでのことを指します。しかし、現在ではグリケーションの概念は、より広いものとなり、核酸や脂質も含めたあらゆる生体分子に生じる錆びや腐食のようなものと捉えられるようになりました。

グリケーションと老化

現在、日本はもとより世界的にも急速な高齢化を迎える時代となり、健康寿命の延伸を見据えた老化制御メカニズム研究の重要性が叫ばれるようになってきました。そして、高齢者の健康維持・疾病予防等を実現する技術の開発に期待が懸かっています。老化それ自体は疾患には当たりませんが、最終的には疾患の発症

に結び付き、そして、死に関連することになります。グリケーション反応は、そのような老化の反応を説明する代表の一つで、慢性的に蓄積する非酵素的な化学修飾反応であり、生命活動を行う限り避けては通れないものになります。

糖尿病は、高血糖が持続する状態ですので、全身のあらゆる細胞や組織が高血糖に曝されグリケーションが亢進している病態といえます。糖尿病診療においては欠かせない血糖コントロールマーカーであるヘモグロビン A1c(HbA1c)は、赤血球中のヘモグロビンのグリケーション状態を測定しているもので、糖尿病合併症の発症進展を予測する非常に優れたバイオマーカーとなっています。つまり、糖尿病の病態は、全身のグリケーションによって老化が促進した状態ととらえることもできます。

グリケーション研究を基軸とした学内・国内・国際共同研究そして国際交流

グリケーション反応は、食品科学においては、古くからメイラード反応といわれています。そのようなグリケーション研究を行う学会には、日本メイラード学会(JMARS)、国際メイラード学会(IMARS)がありますが、現在、金

沢大学は学会運営や研究拠点としての役目を担っています。国際共同研究として、ハーバード大学、ニューヨーク大学、Qatar Biomedical Research Institute(QBRI)、順天郷大学校(韓国)、中山医学大学(台湾)、ナレースワン大学(タイ)などと人的な交流を含めた国際交流を行っています。国内においては、東京女子医科大学、東北メガバンク機構、東京都総合医学研究所、AMED創薬等先端技術支援基盤プラットフォーム(BINDS事業)、兵庫医科大学、東海大学、明治大学、弘前大学などの共同研究、学内では、ナノ生命科学研究所(NanoLSI)、疾患モデル総合研究センター、子どものこころの発達研究センターや、多くの臨床医学系・基礎医学系教室などとの共同研究が進んでいます。そして、日本新薬(株)、日誠マリン工業(株)などの企業との共同開発も進んでいます。

これからも、グリケーション研究を柱とした国際的にも注目をあびるような研究拠点の形成を目指していきたいと思えます。そして、今後さらに、国際的にも評価される質の高い研究成果を発信するとともに、社会実装にも繋がることを念頭に研究を推進していきます。加えて、国際的に活躍できる次代を担う若手人材育成にも貢献していきたいと考えています。



2022年11月12日(土)に開催された第32回日本メイラード学会年会での集合写真

支部だより

福井県支部

令和4年8月28日、第72回十全同窓会福井県支部総会が福井県医師会館にて開催されました。

昨年度同様、コロナ禍のためにマスク着用での出席となりました。世の中は、ロシアによるウクライナ侵略、ペロシ米下院議長台湾訪問による台湾海峡の緊迫化などでやや重苦しい雰囲気でしたが、福井に限っては、この日、山口茜選手がバドミントンの世界選手権を連覇した明るいニュースで盛り上がった日でした。

総会の司会は福井市支部副支部長の岡本清也先生が担当されました。ご逝去された6名の先生方への黙祷の後、久保田紀彦福井県支部長の挨拶、そして、今回の開催当番である福井市支部長の田中延

善先生の挨拶がありました。新しく福井県立病院長に就任された吉川淳先生への就任祝がありました。

報告事項は、平井淳一副支部長からは令和3年度の会計報告が、村北和広幹事からは令和3年度福井県支部会員数と会費納入状況についての報告がありました。

協議事項は、平井副支部長より協議資料1として令和4年度会務計画(案)が、村北幹事より協議資料2として令和3年度・十全同窓会福井県支部会計収支決算報告および特別会計報告がありました。菅田敏明監事による監査報告後、協議資料3として村北幹事が令和4年度・十全同窓会福井県支部会計収支予算(案)および特別会計予算(案)を、協議資料4として久保田支部長が令和4年度・福井県支部役員について取り上げました。引き続き、久保田支部長が令和5年秋発行予定の十全同窓会福井県支部会員名簿発行について取り上げました。十全同窓会福井

県支部だよりについては、平野治和編集委員が投稿規定や県支部だより33号について紹介し、出席者に意見を求めました。

以上の議事終了後、15時20分からは金沢大学医薬保健研究域医学系皮膚科学の松下貴史教授の講演があり、講演終了後にはとても活発な意見交換がなされました。

講演会終了後、津川喜憲幹事による次期開催地区(丹南地区 越前市)の代表挨拶があり、そして、村北和広福井市支部副支部長の閉会挨拶がありました。最後に、全員での記念撮影となりました。

今回も食事会での賑やかな時間を共有することができず、来年に期待したいと思います。ただ、記念撮影の間は笑顔の多い、和やかなひと時となりました。その一瞬が写真にも納まっているようです。

(道傳 研司：記)



クラス会

さんご会

昭和35年卒業同窓会の最終回を開催

去る10月23日、コロナ感染で延び延びになっていたさんご会(昭和35年卒業同窓会)が金沢東急ホテルで開催された。今回は卒業以来、通算56回目の同窓会に当たるが、会員の高齢化に伴い同級生も半数以下に減少したので、今回をもって最終回とすることとなった。

第55回以降、この2年間に物故会員も10名に増え、今回の参加者は夫婦同伴を含め25名であった。卒業後62年間に通算56回の同窓会を、全国各地で開催できたことに感謝し、来し方のさまざまな思い出を語り合い、静かに千秋楽の幕を閉じた。

ここに参加者の記念撮影を添えて、これまでのさんご会の歷程を述べ、これまでに集めた弔慰金と会費・通信費の残り20万円を十全同窓会に寄附したことを会員の皆さまに報告致します。

(佐藤 保：記)



さんご会開催記録

令和4年10月23日

回数	開催期日	開催地	当番幹事	記事
第1回	昭和37年12月8日	金沢市 「味苑」	皮・泌 (稲葉)	
第2回	昭和38年12月7日	金沢市 「トー」	整外 (布谷)	
第3回	昭和40年2月19日	金沢市 「さいとう」	一内 (半田)	記録なし
第4回	昭和41年2月19日	金沢市 「太郎」	一外 (渡辺)	記録・記念写真なし
第5回	昭和42年2月25日	金沢市 「金城楼」	二内	
第6回	昭和43年2月24日	粟津温泉 「辻のや」	二外	
第7回	昭和44年2月22日	金沢市 「大清楼」	放・児	記念写真なし
第8回	昭和45年2月28日	金沢市 「都ホテル」	脳外・精	「さんご会」と命名
第9回	昭和46年2月22日	氷見市 「永芳閣」	富山県	
第10回	昭和47年3月18日	金沢市 「杉の井」	金沢市	記念写真なし
第11回	昭和48年2月17日	芦原温泉 「有楽荘」	福井県	
第12回	昭和49年2月23日	高岡市 「高陵ホテル」	富山県	
第13回	昭和50年8月23日	小松市安宅 「長沖」	金沢市	15周年記念
第14回	昭和51年9月25日	蒲郡市 「青柳」	豊橋市	
第15回	昭和52年9月17日	芦原温泉 「有楽荘」	福井県	
第16回	昭和53年9月30日	富山県 「立山国際ホテル」	富山県	
第17回	昭和54年10月6日	岐阜市 「長良川ホテル」	岐阜県	
第18回	昭和55年9月14日	金沢市 「北間楼」	金沢市	20周年記念
第19回	昭和56年9月12日	芦原温泉 「仁泉」	福井県	記録なし
第20回	昭和57年11月20日	奈良市 「菊水楼」	奈良県	記録なし
第21回	昭和58年10月15日	富山県 「宇奈月グランドホテル」	富山県	記録なし
第22回	昭和59年11月10日	片山津温泉 「矢田屋松濤園」	石川県 (梅田)	記録なし
第23回	昭和60年11月23日	東京都 「帝国ホテル」	関東 (深谷・野田)	
第24回	昭和61年11月1日	芦原温泉 「開花亭」	福井県 (稲葉・村田)	記録なし
第25回	昭和62年10月30日	高岡市 「ホテルニューオータニ高岡」	富山県 (熊谷・斉藤)	記念写真なし
第26回	昭和63年10月29日	山代温泉 「ホテル百万石」	石川県 (半田)	
第27回	平成元年 月 日	芦原温泉	福井県 (打波)	
第28回	平成2年9月23日	金沢市 「つば甚」	石川県	30周年・記念誌「医王第2号」発行
第29回	平成3年9月22日	京都市 「京都ホテル」	関西 (中山)	記録なし
第30回	平成4年10月3日	富山県 「千里山荘」	富山県 (石政・長井)	記録なし 写真のみ
第31回	平成5年9月11日	勝山市 「ホテル勝山」	福井県 (稲葉)	
第32回	平成6年10月29日	浦安市 「トーキューVH」	関東 (深谷)	
第33回	平成7年10月14日	金沢市 「金城楼」	石川県 (渡辺)	35周年記念
第34回	平成8年10月12日	富山市 「名鉄富山ホテル」	富山県 (斉藤・熊谷)	資料なし
第35回	平成9年10月11日	敦賀市 「グリーンプラザホテル」	福井県 (稲葉)	
第36回	平成10年11月22日	福岡市 「シーホークホテル」	福岡県 (三原)	
第37回	平成11年10月16日	名古屋市 「名鉄グランドホテル」	名古屋市(横田)	
第38回	平成12年10月18日	金沢市 「つば甚」	金沢市 (高松)	40周年記念
第39回	平成13年10月7日	富山市 「第一ホテル富山」	富山市 (篁)	
第40回	平成14年10月12日	横浜市 「ニューグランドホテル」	関東 (天羽)	
第41回	平成15年10月12日	宝塚市 「宝塚ホテル」	奈良県 (坂上)	
第42回	平成16年9月19日	松山市 「道後温泉」	四国 (摂津・村田)	
第43回	平成17年9月24日	片山津温泉 「ホテルアローレ」	石川県 (佐藤・梅田)	45周年記念
第44回	平成18年7月16日	宇都宮市 「ホテル東日本宇都宮」	北関東・東北(蘇原)	
第45回	平成19年10月7日	新潟市 「ホテル日航新潟」	富山・新潟(石政・本多)	
第46回	平成20年10月12日	富士市 「ホテルグランド富士」	静岡県 (中島)	
第47回	平成21年9月20日	上諏訪温泉 「鷺の湯」	長野県 (横山・後藤・天羽)	
第48回	平成22年9月18日	金沢市 「金沢ニューグランドホテル」	金沢市 (木南・佐藤)	50周年記念
第49回	平成23年10月22日	奈良市 「ホテル日航奈良」	福井県・奈良県(伊予・坂上)	
第50回	平成24年10月27日	名古屋市 「マリオットアソシアホテル」	名古屋市(横田・河田・塩之谷・嶋崎・油井)	
第51回	平成25年10月13日	富山市 「富山第一ホテル」	富山県 (布谷・篁・石政・北川・熊谷)	
第52回	平成26年10月12日	東京都 「パレスホテル東京」	首都圏 (内山・風間・野田・畑尾)	
第53回	平成27年9月26日	金沢市 「山の尾」	金沢市 (佐藤・木南・筑田・半田・山崎・横浜)	
第54回	平成28年9月23日	金沢市 「金城楼」	金沢市 (半田・木南・佐藤・筑田・山崎・横浜)	
第55回	平成30年10月7日	富山市 「雅楽倶」	富山県 (布谷・石政・斉藤・篁・渋谷・熊谷)	
第56回	令和4年10月23日	金沢市 「金沢東急ホテル」	金沢市 (半田・山崎・筑田・佐藤)	

ク ラ ス 会

四七会

50周年記念同窓会

COVID-19感染症のパンデミックのなかで我々昭和47年度卒業生は卒業後50周年を迎えました。後期高齢者でかつ多くが現役の医療従事者であるということで対面での集会は危惧されましたが、6月(2022年)にパンデミックも小康を得たことから、とりえず状況次第ではキャンセルすることを覚悟で、10月15日にホテル日航金沢で行うことを決定しました。その後8月には第7波の最大のパンデミックとなり開催が危惧されましたが、9月に入って幸いにも急激に感染

者は減少し、予定通り無事に開催することができました。それでも勤務病院の規定や持病・闘病中などの理由で集会への参加を見合わせるとの連絡が相当数あり、最終的には沖縄から山形県まで全国から40名の参加がありました。10~20年ぶりはもちろん、卒後初めて同窓会に参加した級友もいて、マスク姿と相まって誰かわからず戸惑う場面も多くなりましたが、体つきや声を聴くと遥かなる青春時代が蘇ってきました。

物故者(50年間で18名)に黙祷を捧げたのち、出席できなかった級友の近況報告が披露され、その後、十全同窓会から提供を受けた昭和40年代の医学部・大学病院や金沢場内教養部キャンパス風景と現在の風景を比較したプレゼンがあり、その激変ぶりに時代の流れを痛感するとともに、一同が生きた激動の時代を改め

て噛み締めました。その後、再会を祝い、また出席できなかった級友を含めて一同の健康と長寿を祈って乾杯し宴会に入りました。宴会では、各自が50年を振り返りながら近況報告を行いました。それぞれが様々な専門分野や医療の現場で必死に生きてきた軌跡が随所に語られ、それぞれが感慨深いものでした。昔に帰っての野次や笑いも飛び交い、予定の2時間半はあっという間に過ぎてしまいました。次期同窓会については、10年後はすでに予測困難な年齢であり、“5年後に可能であれば——”ということとしました。最後に四高寮歌を一同で合唱し宴会を終了、5年後にも多くの級友が元気に集まれるように祈って散会しました。

(松井 修、上田 博：記)



四八会

昭和48年卒業生の同窓会が2022年10月8日に金沢駅前のホテル日航金沢で開催された。予期せぬ新型コロナウイルスの流行のために予定していた2021年9月の3連休に開催できず、1年遅れの開催となった。新型コロナ流行下で職員の飲食を伴う会合の参加は原則不可としている医療機関の開設者が不参加となったことも影響したと思われる。それでも前回より18名減の29名の参加があった。

同窓会は直近4年間に逝去した桃井文

夫君、勝川和彦君、山崎英雄君への黙祷、世話人挨拶、十全同窓会長山本健君の挨拶と乾杯で始まった。山本君の話、競争を勝ち抜いてきた団塊世代の48年卒の死亡率は他の学年より低いようだ、には妙に納得した次第。卒後50年間の近況報告は一次会終了間際まで続いた。沖縄から参加の大城君の何人ものリタイア者があること、転職した勤務医も多いことがわかった。時の流れを感じた。一次会の最後に日本医師会最高優功賞を授与された諸岡信裕君の活躍ぶりが披露された。場所を移しての二次会には29名中26名が参加し、小グループに分かれての話し合いも盛況であった。あるグループでは前立腺がんの系統講義になり、関心が自分の健康に向いていることを知っ

た。富山で皆既日食が観察される十数年後も同窓会で元気で会おうと誓った。次回3年後の同窓会は福井県担当となり、田中延善君、菅田敏明君、木下元君の3名が企画することになった。

(西村 邦雄：記)

集合写真の名前(左から)

(最上段)前田、佐賀、村田

(3列目)川村、神村、長沖、西島、渡部、
浜谷、石橋、桜井

(2列目)江守、沢木、道岸、田中、余川、
高田、菅田、田上、安田(和)

(最前列)加藤、武藤、中野、大城、西村、
諸岡、柳田、山本



“メディカルオーケストラ金沢”の演奏活動

金沢市福祉健康局担当局長(保健所長)

越田 理恵

(昭和58年卒業)

2020年1月に我が国で初めて新型コロナウイルス感染者が報告されて以降、約3年に及ぶコロナ禍により、医療を取り巻く環境は一変し、医療のみならず、経済活動や市民活動にもさまざまな制限が加わりました。

主な演奏の場を病院内に置き、病気療養中の方々とそのご家族の皆さまに生のクラシック音楽を聴いていただくこと、楽器演奏経験のある医療関係者によって立ち上げられたメディカルオーケストラ金沢(Medical Orchestra Kanazawa 以下MOK)の演奏活動も例外ではなく、2019年8月に金沢医療センターで行った院内コンサートを最後に、一切の演奏活動は中止、この間3度、音楽堂での演奏会を試みようとしたのですが、いずれも感染の波にのまれて開催できませんでした。しかし、With Corona Phaseに入った昨年(2022年)8月、県立音楽堂で3年ぶりの第13回定期演奏会を開催しました。プログラムは2020年の生誕

250周年に叶わなかったベートーベンの王道、交響曲5番「運命」&ピアノ協奏曲5番「皇帝」。これまで、金沢医療センターの講堂や金沢大学病院宝ホールで練習を行ってきましたが、現在は院内に立ち入ることができないため、宝町キャンパスの医学部十全講堂と記念館を利用させていただきました。医学部関係者の皆さまには、両施設をお借りすることにご理解をいただきました。心から感謝申し上げます。

さてMOKのルーツは、2004年から行われていた金沢医療センターに勤務するバイオリン、フルート、ピアノを演奏する3名の医師(越田[昭和55年卒業]、瀧口[昭和57年卒業]、伊勢[昭和61年卒業]、いずれも十全同窓会員)による院内コンサートにさかのぼります。この院内コンサートは時々外部のゲストを迎え、10年間に70回近く開催されました。そして10年後の2014年、医療センターに中古のグランドピアノが設置されることになり、お披露目にピアノ協奏曲をやらうと仲間内で盛り上がりました。往年の楽友に呼び掛けて30名程度が集まり、医療センターの講堂で、こじんまりとモーツァルトのピアノ協奏曲23番と交響曲40番を演奏しました(指揮は山口

[昭和63年卒業])。

ところが、この演奏が予想以上の反響を呼び、以降、年2回(2月と8月の学会オフシーズンの最終金曜日)金沢医療センターで定期的に演奏会を開催し、その前後の日曜日に金沢大学附属病院や金沢医科大学病院でも同じプログラムで演奏会を続けてまいりました。この間、趣旨に賛同して参加するメンバーは徐々に増え、70名を超えるフルオーケストラとなり、大曲にも挑むようになってまいりました。メンバーは勤務医、開業医、薬剤師、看護師、検査技師、臨床心理士など多彩、何かしら医療に繋がっていればウエルカムで、学生さんも参加しています。

本番で初めて全員が揃う(いや揃わなかったこともあり)のが常で、本番の最中に遅れて飛び込んできて何事もなかったように座って演奏を始めたり、また終了後一目散に病院に戻るメンバーもいました。本番の2~3か月前から各自パート譜をダウンロードし、数回の合奏練習で本番に臨むという感じですが、練習時の動画や録音が練習後にメーリングリストを介して即アップされ、参加できなかったメンバーにとっては自己練習の一助となっています。練習回数が限られるので、本番1週間前の練習で、各々



第8回定期演奏会(2017年8月27日、金沢大学病院)
指揮：山口泰志 コンサートマスター：林克洋
ヴェルディ「椿姫より乾杯の歌」 独唱：林克洋、梅村佳代
ロッシーニ「ウィリアム・テル」序曲
ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」 ピアノ独奏：伊勢拓之
ベートーベン「交響曲第7番」

これで大丈夫かな?と一抹の不安を感じても、マエストロ山口の「いいですね。ずいぶん様になってきましたよ。これで本番も大丈夫!」の言葉に乗せられて、大丈夫な気分で大番を迎えると、気づいてみたらベストパフォーマンス!を繰り返してきました。また本番に突然参加できなくなったメンバーがいても臨機応変に補完し合う危機管理マインドも自ずと発揮。そんなこんなで、病院内外での演奏会は多くの患者さんにご家族にもお越しいただき毎回盛況でした。医療者それぞれが医療現場以外の場面で「思い遣りの危機管理マインド」と「可能な限りの集中力」で取り組んでいる証が我々の演奏です。所詮アマチュアの演奏ですが、そのあたりの心意気が聴きに來てくださる方々の心に響くのかもしれません。

2018年1月の石川県立中央病院の新築記念柿落しでは、ニルンベルクのマイスタージンガーを演奏し、4月の風と緑の楽都音楽祭でも同曲を演奏いたしました。また同年8月には、石川県立音楽堂コンサートホールで特別定期演奏会として、チャイコフスキーの交響曲4番とピアノ協奏曲1番というプログラムで初めて自主企画の本格的な演奏会を行いました。

一方、医療系の学会や研究会、医師会等の会合での演奏依頼にも可能な限りお応えてまいりました。第122回日本小児科学会学術集会(2019年4月)では、城址公園内の五十軒長屋で行われた会長招宴での小編成の弦楽合奏を行い、音楽堂コンサートホールで行われた市民公開講座ではフルオーケストラで、ガーシュインのラプソディ・イン・ブルーはじめ、ブラームス交響曲2番、ヨハンシュトラウス等の楽しいプログラムを企画しました。また三師会(医師会・薬剤師会・歯科医師会)のアトラクションでは、薬剤師の皆さまの歌と一緒に演奏しました。最近では、2022年12月に和田学長が世話人を務められた第33回日本糖尿病性腎症研究会のランチタイムコンサートで、クラシック(モーツァルト、グリーグ)からタンゴ、美空ひばりまで、おしゃれな演目の弦楽合奏を演奏させていただきました。今後も、学会や研究会等でお手伝いできる企画がありましたら、可能な限りお応えてまいりますので、ご相談ください。

当面は、院内コンサート形式の演奏会の開催は難しいと思われませんが、2023年2月5日(日)に県立図書館で有志によるクラリネット五重奏等の室内楽、7月30

日(日)には県立音楽堂コンサートホールでフルオーケストラと、公募の合唱団による「真夏の第九」(ベートーベン交響曲第九番 合唱)を予定しています。合唱への参加は、一度は第九を歌ったことがある方という条件で公募を予定しています。ご関心がある方は、下記ホームページおよびQRコードにてご確認ください。(ホームページ担当は林[平成9年卒業])

これからも、私共は闘病中の方々やご家族の皆さまに音楽を介してのメッセージを届けていきたい、そして石川県で小さく生まれた音楽活動が無理のない範囲で継続していくことができればいいなと思っています。楽器演奏のご経験があり、私共と一緒に演奏をしてくださる先生がいらっしやましたら、どうぞお声掛けください。また、十全同窓会の会員各位には、今後とも我々の活動を温かく見守ってくださることをお願い申し上げます。

【メディカルオーケストラ金沢 ホームページ】

<https://khayashi830.wixsite.com/mokanazawa>

(過去の演奏会の記録や動画、今後の予定などを配信いたします。)



第10回定期演奏会
(2018年8月24日、石川県立音楽堂コンサートホール)
指揮：山口泰志 コンサートマスター：越田潔
チャイコフスキー「ピアノ協奏曲第1番」 ピアノ独奏：伊勢拓之
チャイコフスキー「交響曲第4番」

Student Doctor 認定証授与式ならびに白衣着衣式

十全同窓会より白衣を寄贈しました

医学類4年生へのStudent Doctor認定証の授与式ならびに白衣着衣式が令和4年10月27日に十全講堂において行われました。Student Doctorの認定は臨床実習の開始前に行われます。診断学実習など所定の臨床基礎医学の授業科目(28科目)に加えてCBT(Computer Based Testing)およびPre-CC OSCE(Objective Structured Clinical Examination)に合格することが条件となっています。今年度は117名が認定され、10月31日から1年間の臨床実習が開始されました。医師への階段をさらに一歩のぼったこととなります。



認定式では、杉山医学類長より学生一人一人に認定証が手渡され、左肩に大学名と個人名が入っている白衣(ドクターコート)を医学類の関係者と手分けして全員に着せ掛けてまいりました。これまでは、医王保護者の会からケーシー型白衣の上下をご提供いただいていた。今年度より十全同窓会からもドクターコートを贈らせていただくことになりました。

医学類生は十全同窓会に準会員として参加していただいておりますが、卒業後に本会員となる割合が年々減少しています。ドクターコートを贈ることによって、同窓会活動に対する理解が深まることを期待したいと思います。

杉山医学類長の訓示、堀医薬保健学域長および蒲田附属病院長の祝辞に続いて、大竹が十全同窓会長の代理として祝



辞を述べさせていただきました。祝辞では、和倉温泉の加賀屋におけるサービスの定義について紹介致しました。加賀屋のサービスの定義は、「プロとして訓練された社員が、給料をいただいて、お客

さまのためにお役に立って、お客さまから感激と満足感を引き出すこと」だそうです。言い換えると「正確性とホスピタリティ」になります。病院でも患者サービスの向上という言葉がよく使われます。学生諸君も、将来、医療のプロとして、患者さんから料金をいただいて働くこととなります。臨床実習の機会に、プロとして、正確に診断し、適切な治療を施せる基礎作りを行っていただきたいと思えます。患者さんが満足し、感謝される医師への第一歩となるように臨床実習に最大限の努力を注いで取り組むことを期待致します。学生諸君のますますのご精進とご発展を願っております。

(大竹 茂樹：記)



Student Doctor代表宣誓

令和4年10月27日、臨床系統試験や共用試験を全て突破した私たちは、無事この日を迎えることが出来ました。Student Doctor認定証を受け取り、ドクターコートを着せていただいたとき、いよいよ臨床実習が始まるのだという実感が湧きました。その後、先生方からご祝辞を賜りましたが、その中で特に印象に残っていることが2つあります。1つ目は、医師として一番大事なことは笑顔と挨拶であるということです。患者さんは、医師がどんなにすごい手術をしても思っているほど感動してはくれず、むしろ優しく笑顔で思いやりをもって接してくれる医師の方が患者さんからの評価が高かったりするそうです。最も基本的なことであるからこそ、どんなときでも疎かにならないように胸に刻んでおかなければならないと改めて感じました。2つ目は、患者さんは学生のことも医師だと思っているということです。私はこれを聞いて、1年生の早期医療体験の時に先生と勘違いされたことを思い出し、なるほど確かにそうだと感じました。将来医

師になる身としての覚悟をしっかりと持つこと、これは非常に重要です。そしてそれをベースに、患者さんから信頼される医師になれるよう、医学生として皆さまの期待に恥じぬ行動を心がけたいと思いました。

私たちは入学以来、主に講義室において座学で医学知識を習得してきました。しかしこれからは、実際に病院で現場に立ち、患者さんや先輩医師・メディカルの方々などからたくさんのことを教えていただくこととなります。医師として必要な技術や態度だけではなく、高い倫理観、使命感、責任感など、座学だけでは学べないことを身に付けられる貴重な経験の連続であると思います。また、それであるからゆえに、困難な課題に直面する機会に何度も出会うと考えられます。最初は自分ひとりで問題解決の糸口を探ろうと努力することが必要ですが、考えが滞ってしまった際には、グループ内で共有してヒントを得、時には先生方からのご指導を受け、ひとつずつ乗り越えていきたいと思ひます。感謝の気持ちを常



に忘れず真摯にかつ積極的に臨床実習に取り組み、新たな学びを得られるよう一日一日を大切に過ごしていきたいです。

最後になりましたが、このコロナ禍で、Student Doctor認定証授与式ならびに白衣着衣式を開催して下さった先生方や学生課の方々、その他関係者の皆さまに医学類4年生を代表して心から御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

(医学類4年 大矢菜々美：記)



十全昔話

同窓の先生との出会い

野村 暢郎

(昭和43年卒業)

私は昭和43年卒業後、2年間の民間病院研修(福島県郡山市)を経て、東北大学医学部第3内科(現:消化器内科・糖尿病代謝科)に入局し、消化器の免疫とマクロファージの研究を行い「アミロイドシスの成因」のテーマで医学博士授与。以後は文部教官助手・講師を務めました。現在は最初の赴任地の岩手県一関市で県職員定年後も非常勤医師として勤務しております。また、十全同窓会岩手支部長ですが残念ながら活動は休止状態。

十全同窓会会員から、既知のお二人の東北大学医学部教授が誕生しております。お一人は腫瘍免疫学の橘武彦先生(昭和27年卒業)が抗酸菌研究所(現:加齢医学研究所)の免疫学研究部門教授(昭和49年ご就任)。昭和53年秋と記憶していますが、福岡での学会帰りの飛行機で偶然隣の席に座りました。仙台までの約90分のフライトで示唆に富むお話をいただきました。その時、SSM(いわゆる丸山ワクチン)の治験中ですが先生はどう思われますかと単刀直入に尋ねた。がんの免疫療法としては微妙なテーマで積極的なコメントはもらえませんでした。当然でした。

その研究の代表は後藤由夫第三内科教授。私が実務担当者として参画しました。北海道・東北36施設130人の大規模な治験で、結果は「医学の歩み・第127巻・第1号:昭和58年10月1日号」に掲載。治験のデザインや統計処理など他大学の先生方にお世話になりましたが、論文中の謝辞は皆さんからお断りされた。

その伏線はまとめ上げたデータについて、中央薬事審議会の桜井欽夫座長が記者会見で「長期生存例はがんかどうか疑わしい」旨の発言があり、後藤教授と執筆責任者の私と連名で病理組織を提示し、異議・訂正を申し入れた(昭和56年7月29日:毎日新聞報道)ことも影響したのでしょう。私もマスコミに振り回された。

橘教授とはその後も仙台で何度かお会いしました。私が岩手県に赴任して数年後にお会いした時、ストレートに「お痩せになりましたね」と言ったら「野村君、スマートになったというものだよ」と諭されたことが今でも心に残っています。確か、清野弘明先生(昭和60年卒業)も一緒に講演会の時でした。令和になり十全同窓会会報で先生の訃報に接しました。心優しい先生でした。

なお、SSMは治験により延命効果は有意傾向にあると結論しています。また、40年以上経過した現在でも有償治験薬として処方されていますが、その不可思議な取扱い方は「ザ世界仰天ニュース」(平成30年1月9日)でも注目されていました。

もうお一人、岡本宏先生(昭和39年卒業)が医化学第一講座教授に就任されています。ご尊父はOK-432(ピシバニール)の開発で有名な岡本肇名誉教授(SSMの論文で引用させていただきました)。

私は、竹田亮祐教授(橘教授の同級生)主催の「第19回糖尿病学の進歩」に参加しました。昭和60年3月15日で宿泊は武蔵ヶ辻の旧金沢スカイホテル。その

日偶然にも岡本先生の「東北大学教授就任祝賀会」が開催されていました。実は、SSMの論文を読んだ学生の清野君から卒業研修の相談をいただいていたので、金沢でお会いすることが主目的でした(後述)。

岡本先生は「膵β細胞の破壊されるメカニズムの研究」で著名で、糖尿病学が専門の後藤由夫教授が三顧の礼を尽くし東北大学に招聘しました。第三内科糖尿病グループも指導され、共同研究も進展し、たくさんの学士を育て上げました。卓越された先生の業績は、第93回の「日本学士院賞」に輝いておられます。受賞は東北大学医学部では10人目(平成15年)。御尊父も受賞されております。

先生がニューヨークの学会にご出席の時、世界に3冊しかないダーウィン原著の「種の起源」を見つけて購入されたという逸話が知られています。その貴重な本は定年時に際し東北大学に寄贈されたそうです。なお、平成27年7月に金沢の同窓会総会でお会いした時、宮城県に十全同窓会支部はありませんねとお話したら「自分がつぶした」と言われましたが、真偽のほどは不明。

前述の清野君は、昭和60年5月に清野医師(研修医)として岩手県一関市の県立磐井病院内科に着任。地方の基幹病院で症例は豊富。仕事熱心で何回も学会報告をお願いしました。

特筆されるのは昭和62年7月の第15回日本臨床免疫学会総会(札幌)で発表した「SLEとPBCの合併」の本邦第一例の

報告です。当時、抗ミトコンドリア抗体は徳島大学が研究をリードしており、清野先生は検体を送り、現在のM2が本邦初めて検出されたと報告を得ています。論文化しなかったので引用されていないのは私の怠慢と忸怩たる思い。

清野先生は3年間の研修の後、東北大学第三内科に入局し、岡本教授の共同研究者のもとで糖尿病と免疫の研究を行い、その後、福島県郡山市の太田西ノ内病院の糖尿病センターに赴任されました。勤務しながら東北大学第三内科臨床准教授と福島県立医科大第三内科非常勤講師も務めました。わかりやすく話し上手でよく講演を頼まれています。現在、郡山市で開業し盛業中。

私は縁もゆかりもない岩手県に奉職し40年。たくさんの人と交流し大過なく過ごしてきました。今回会報への寄稿を依頼され、ご縁ある3人の同窓の先生との出会いを紹介させていただきました。偶然過ぎるめぐり合わせです。また、同じ市に医学部同窓生が4人もいるのも心強い限りです。



十全昔話

昭和40年度金沢大学
医学部入学生の独り言

池田 孝之

(昭和46年卒業)

はじめに：私は、昭和40年に金沢大学医学部進学課程に入学しました。今回の執筆の目的は、一人の学生が医学生の際に関心のあった基礎医学の研究室そして入局した診療科の研究室と医局長の時代まで、当時感じた思い出の一齣を書いたものです。ただし、私は最終的に循環器病学を選択しましたので必然的に循環器関係の独り言が多くなりましたことをお詫びします。教養部；私たちは、これまでの受け身の学びでなく、能動的に知に係わってその知の創造に資する精神を養う目的で、2年間教養部に身を置きました。ラテン語を含む語学や数学、物理学などを通じて、創造的な学問の世界に目を開くことを目標としました。基礎医学：第一解剖では、本陣教授は、自ら積極的に顕微鏡で人体の組織を観察し、疑いを持ったときは、それに目をそらさず自ら考え、真実を追究する態度が大切と言われました。第二解剖は山田致知教授でした。骨、神経、臓器がすべてラテン語で書かれた山田先生の解剖指針の本が渡されました。この本の扉に次のドイツ語がタイプで打たれていました。「Alles Gescheite ist schon gedact worden. Man muss nur versuchen, es noch einmal zu denken, (von Goethe)」訳しますと、「すべての事柄は考えられているが、もう一度やってみて考えることである。(フォン・ゲーテ)」となると思えます。山田先生は、解剖学での人体の形態はすべて知りつくされているように考えるかもしれないが、今一度、解剖を

行くと、新たな知識とその創造的思考が生まれるものと思われると医学生に教えたのかかもしれません。ゲーテは、とかく詩人の印象が浮かびますが、比較解剖学や形態学に秀でた学者でもありました。私は午後遅くまでの解剖が常態化し、時には朝方まで解剖を続けたことがありました。第一生理学では斎藤幸一郎先生が教授でした。新生理学・下巻(医学書院)の先生ご執筆の酸塩基平衡を学び、一方、松田幸次郎先生がご執筆の同書の第5編循環器は私にとって循環器病学の生涯の教本となりました。第二生理学は大村裕教授で、上記の上巻で神経のendpointでのtransmitterについて重点的に講義なさいました。夏休みに小野武年先生からガラス微小電極の作り方を習いました。昭和63年、大村先生は日本学士院賞を受賞されたとの知らせに感激しました。第一生化学は米山良昌教授でした。私たちは、White/Handlerの英語で書かれた生化学の本を使用しました。ある日、何故COがCO₂に比して200倍以上の酸素の親和性を有するのか、この数値はどのような方法で算出されるのか苦慮しました。第二生化学は久野滋教授と岡田俊彦先生が講義されました。岡田先生の講義だったと思いますが核酸の話がありました。ワトソン、クリックはDNAが生物の遺伝情報を担っているとすると、自己複製の構造があると考えて、手作りの金属の分子模型を作って研究していたと話されました。そこで私は医学部図書館で専門書



を調べました。塩基対の話はそれなりに理解できたのですが、分からなかったのは、DNA二重らせんで一方のらせんは左下から右上に向かって捻じれ、他方のらせんは逆に下方に向かい、模型図を上下に反対にしても、同じ捻じれが見られることでした。二つの生化学の研究室は一つの世界に融合された感じで、静謐な空気が漂う印象をもちました。DNA二重らせん構造で塩基対が二重らせんの内側に存在することを発見した若いロザリンド・フランクリン(注：ロザはラテン語のRoseの女子名)も静かに繊維のX線解析をかような雰囲気の中で研究していたのではないかと想像しました。これは50年前の話です。細菌学は西田尚紀教授の講義を受けました。西田先生は細菌の講義の中で“良い医師を目指すものは尿を舐めることも大切”の話をされました。講義室はどっと笑い声が起こりました。18世紀には「病気の原因は体液の不均衡」が関与とする考えがあり、同時代の外科医学の開祖のジョン・ハンターが、病気の進行度を知るときには、知覚を通して体験することが重要であるとし、味覚として胃液の味について述べています(解剖医ジョン・ハンターの数奇な生涯 ウェンディ・ムーア 河出書房新社)。続けてジョン・ハンターは五感をどれだけ活用したとしても、それは周辺の技能に過ぎないとして病理解剖の基礎を作りました。西田教授はこのことを知っておられて、良い医師は尿を舐めるとおっしゃったのではないのでしょうか。話はか

わり、先生は講義の合間にSchoolの原義は暇を意味するギリシア語のScholeを揺籃とすると話されました。だから諸君はゆとりと楽しみをもって学問に臨んでほしいと言われました。私は大切な言葉と思いました。なぜなら大学は新しい知を創造するところなので、大学はかような時間を与えていただいているという矜持があると思っていたからです。**臨床医学**：旧第一内科 私は武内重五郎教授と服部信教授そして後年東大教授になられた杉本恒明先生に師事しました。私は循環器病学を専攻しました。ある日、杉本先生は“師はもたないように”と言われました。先生のお言葉は「師に頼らず、単に知識を得ることで満足せず、自ら能動的に知に係わって知を創造するように」という意味と解釈しました。しかし、循環器内科という大海原を師という輝く星を目印にしない航海は困難であると判断しました。そこで私は、上述しましたように、能動的に大学の知の創造の精神を大切に先生を私淑することにしました。私は不整脈に関心があったので、プルキンエ線維の電気生理学的特性について、東京の心臓血管研究所で東大の飯沼宏之先生のご協力でガラス微小電極により犬の心筋を長時間ハイポキシア(低酸素)にしてプルキンエ線維の活動電位を測定しrepetitive activityが誘発されることを明らかにすることができました。

杉本先生は、医局員それぞれに気を配られて将来の成長を願い、静かに後ろ

からご尽力されました。循環器医師は感銘し、能動的に研究に取り組むのでした。例えば、麻野井英次先生は、杉本東大教授、服部信教授方々の推薦で富山医科薬科大学に赴任し、そこで若い医師の研究指導とともにCirculation、Journal of American College of Cardiology (JACC)、American Journal of PhysiologyそしてCirculation Researchなどに論文を掲載しました。昭和52年以降循環器医師は、海外で研究または発表し、その前後より論文を書くのに努力しました。若い医師に日頃注意しましたことは、学会発表に留まる場合は教育や勉強になります業績には評価されないもので、貴重な症例は論文(注：もちろん英文です)にされることが大切と若い医師たちに伝えました。例えば、中村由紀夫医師はモントリオール大学心臓研究所に留学して任務中にSubstance PについてCirculationに掲載して帰国しました(Circulation 1991;84:300-312)。金沢大学医学部は旧金沢医科大学の伝統と歴史を有し静謐な研究の場を有するとともに、国内や世界に通じる役割を果たしています。医学の学問は、真理を探究、発見し、結果として病気を治し、健康を維持・増進するためにあります。そこには、大学の知は社会のためにあるという矜持があると私は思っています。

十全昔話

僕の心の中にある
スーパー・インテリジェンスたち

篠原 治道

(昭和49年卒業)

今の金沢大学医学部基礎棟の正面玄関左手にある黒川良安翁の胸像をしり目に右手の階段を2階へのぼり、医学部図書館方向への廊下を見渡すと左手に多目的室という学生たちのスタディ・ルームが5つばかりが、右手には医学部の歴史などを概観できるショウウィンドウが並んでいる。この廊下をゆっくりと、とくに藩政期以来150年の医学のあゆみなどを見ながら歩くと以前のこの廊下で起こったことを鮮やかに思い出す。以前？それから既に半世紀50年も経っている。それは本学部の歴史の1/3にちかい昔である。

左手の多目的室は昔、生理学実習室であった。当時の第2生理学は大村 裕教授がご担当で、簡単なオッシロ・スコープなどの実習機器の他に卓球台が置いてあった。大村先生はまだお若かったせいかわ体は卓球で、体力はバーベキューBQで養う」といった教室のキャッチフレーズが学生の間でも拡散していた。勉強とか学問など大村先生ご専門の頭や脳といった文字が入っておらず、身体や健康が優先されているところが良かった。学生でも空き時間があれば卓球台を勝手に使って構わないとのことだったから普段は実習室というよりも卓球練習場といった感を呈していた。僕がその練習仲間に入ったころ、1人の若い、生理学の先生と知り合いになった。小野武年先生であった。小野先生は色黒の大変スリムな方で、油断も隙もない敏捷かつ果敢な攻めの戦い方をされた。卓球中ムツとか

クソツの他にはほとんど話をされず、腰を低くかがめた、表現するにはあまりにも特異なフォームだったのですぐに名前を覚えた。とくに白衣を着て登場された場合は要注意で、「白衣を翻して相手の視線をそらし、おきた風力を利用して球を打つ」とニタツとして嘯かれたのには〈さすが生理学者〉と失笑せずにはおれなかった。大物だった。

そんなある日、大村先生の授業でレポート課題を出された。確か〈〇〇のアクション・ポテンシャル計測結果を記録するためのcomputer programをフローチャート形式で提出しなさい〉といった類の課題であったと思う。もともと電気・機械音痴を自認していた上に生理学では卓球しか勉強していなかった僕は泡を喰らって小野先生に相談した。「そりゃ、杉森君だよ。彼に相談しなさい」だった。実のところ、杉森睦之先生とは数回しか卓球のお手合わせをしたことがなく、もじもじしていると、「僕から言われたと言えればいいよ」と言って下さった。杉森先生はその頃生理学の大学院へ入られた直後くらいだったと思う。小太り気味であるが筋肉質のガッシリした体格で、夏は半そで短パンに白衣をひっかけてコンピューター室に昼夜分かたず座っている方だった。大村生理学教室では最も後輩だったためか、BQの際は用具やお惣菜の準備係だった。1~2度車にBQ用具を積み込むのをお手伝いしたことがあった。「あのう実は小野先生に言われまして、教えて頂きたいのです



が・・・」と切り出してレポート課題を見せると「うん、これ。近頃何人も来るね。ちょっと待って」と言いながら数十行のフローチャートを打ち込み「これを提出すればいいよ」とレポート用紙を手渡された。その間わずか1~2分だったかと記憶する。1970年の出来事で、専門課程へ入って間もなくの僕にとって衝撃だった。その頃僕は様々な外国関係の用事にIBM最新ball scriptのtype writerを使っていた。当時、英文タイプライターのキーボードを打てる大学生は英文科などの学生、しかも女子がほとんどであった。まして、男性で数学や物理学の特殊文字を使うフローチャートを打ち込める男性はきわめて稀だった。しかも、この杉森先生は「ああ、このコンピュータね、前から少し調子悪くて先週から分解しはじめて、今朝漸く具合が悪いところがあったんだ。今日はうまく動くかもしれない」などと事も無げに言うではないか。〈この部屋の壁面いっばいを埋めている電子機器を分解した？悪いところを見つけた？再び動くように組み立てた？〉キーボード程度の話ではない。これこそスーパー・インテリジェンスの仕業であると知ったのである。因みにアップル・コンピュータが設立されたのは1976年であることを考えれば、今の人々にもその時の僕の驚きが理解してもらえと思う。

別れはすぐにやってきた。小野武年先生は金沢大学での学位取得直後の1970年にはNew York State University

へ留学された。杉森睦之先生も本学で学位取得後、1974年にWayne State University School of Medicineへ留学され、1995年にNew York University Medical Center, Physiology and Neuroanatomyの教授に就任された。以来、今日までニューヨークおよびマサチューセッツ州ファルマスFalmouthに在住である。1974年に僕は金沢大学医学部を卒業した。

1980年にいささか思うところがあり僕は山本 博先生(本学生化学講座前教授、現公立小松大学学長)の勧めもあり設立間もない富山医科薬科大学の解剖学教室へ赴任した。そこで思いもかけず小野武年先生と再会した。小野先生は米国から帰国後間もない1977年に富山医科薬科大学の第二生理学教室の教授に赴任されていたのである。1980年頃は既に富山医科薬科大学の学問的な意味で2枚の看板教授の1人であった。もう一人は岡本宏教授(金沢大学医学部39年卒業。東北大学名誉教授・富山大学名誉教授、生化学)である。お二人の学問的關係は10年ばかり後輩の僕にとってはスーパー・インテリジェンスのお手本だった。

杉森睦之先生との再会は僕が金沢医科大学の解剖学教室教授だった頃、2005年の年末だった。突然、富山の小野武年先生から電話があり、「杉森君がお父上が重病で『どこか入院治療するのに適切な病院がないか』と尋ねてきたから『お父上は七尾市にいらっしゃるのだから、金沢医科大病院が宜しかろう。篠原君を

覚えてるかい？君が僕に任せるというのであれば僕から篠原君に連絡をするけれど』と答えた。」由であった。僕に否応などあるわけもなく、それを機に杉森先生との再会を内灘の大学で喜びあった。考えてみれば、これらは僕の心の中で半世紀経た今も色の褪せないエピソードである。

僕としてはもう少し学問の内容に立ち入りたい気持ちで書きだした。特に、杉森睦之先生・小野武年先生の脳の生理学と僕が現在従事している脳の肉眼解剖学については蘊蓄を傾けたい気持ちになっている。彼らのスーパー・インテリジェンスぶりは学問抜きには不十分だからである。しかし、それでは話に限りがなく紙面も尽きた。こらで擱筆するとしよう。

追記：医学部基礎棟2階の本学部ゆかりの学士院賞受賞者9名のうち、大村 裕先生、岡本 宏先生のお二方が僕にとって大変身近に感じられる方々である。しかし、本学にはこの他にも多くの、隠れたスーパー・インテリジェンスの方々の存在があることを折に触れて思い出してはこの上なく幸せに感じている。

追記2：小野武年先生は本稿提出直後、お亡くなりになりました。多くの思い出に感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

金沢大学医学生と「生と死」を考える： 麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告(その6)

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科(緩和ケアセンター)

山田 圭輔

金沢大学医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は苦境の中をいかに生きることができるか、医療者はどのような支援ができるかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」の課題を与えています。令和4年度5年生の実習は10月から始まり、多くの優れたレポートが提出されています。本稿では北村孝一君、赤尾有莉さん、浜木清寛君(写真)のレポートを紹介します。

1)がんになった緩和ケア医が語る 「残り2年」の生き方、考え方

(関本剛、宝島社)

肺がんステージIVで余命2年を宣告された時、関本先生は43歳で、妻と2人の幼い子供、自身のクリニックもありました。先生は、苦境の中で何を思い、何を願って生きたのでしょうか。

先生は、身体以外の苦痛が小さくなっていくことで治療に前向きになれたと述べています。具体的には、子供も含めた家族に病気を伝えて受け入れてもらえたこと、同僚や先輩や後輩、患者さんから沢山の励ましをもらったこと、将来の金銭的シミュレーションなどです。現実的な問題が解決していくことで将来のことを考える余裕ができ、自分のやりたいことや大切にしていることに目線が戻っていきました。

関本先生は緩和ケア医として、患者さんと対話することを大切にされました。自身が病気を体験することで、その思いはさらに強くなったそうです。先生が患者さんを励ます時、言葉で直接伝える以外の方法も大切だと考えていました。具体的には、メッセージや文章、映像や音声です。これらは患者さんに届く時間や場所を選びません。患者さんが必要とする場面で励ましを伝えられる手段なのです。

先生は亡くなる1カ月前まで診療を行い、患者さんと話すことを大切にされま



写真：実習時の記念写真(2022年10月)

後列：網野(麻酔科蘇生科)、浜木、木下、北村、池田、筆者
前列：竹田、若山、大畑、赤尾

した。もっと多くのがん患者さんの力になりたいと考えてこの書籍を出版し、講演にも精力的に取り組みました。先生は言葉だけでなく、表情や態度や自身の生き様で、患者さんや多くの人々を励まし続け、先生の気持ち(=心)は皆の支えになっていると強く感じました。

2)なぜ私だけが苦しむのか

(クシュナー、岩波現代文庫)

耐え難い苦難に直面した時、人はそこに意味や目的を探そうとする。そして時には、苦難を「神様によって与えられた試練」とか「神様からの天罰」などと捉えることで、自らを納得させようとする。

ユダヤ教のラビ(教師)である筆者は、自分の息子を不治の病で亡くした。神の前に正しいとされる生き方をしようと心掛けてきたにもかかわらず、なぜ神は私をこんな目に合わせるのか。このような問いは筆者をさらに苦しめた。崇拜していた神に裏切られたような気持ちと、それによる悲しみや怒り、そして孤独感を抱き、さらに怒りを抱いた自分に罪の意識を感じたからだ。

悲しみに打ちひしがれている人に対して周囲がかかるべき言葉というのは非常に難しい。苦しみに意味や目的を持たせることが心の支えになる人もいるが、周囲の人間がそれを苦しんでいる人に対して言う権利はない。また、「あなたの気持ちがわかる」などと簡単に言うこともできなければ、励ますことで痛みを程度

を小さくしようとすることも適切ではない。医療者として苦難を抱えた患者さんに対してできることは、悲しみや不安に寄り添い、あなたは一人ではないと心から伝えることだと私は思う。

3)銀河街の悪夢(SEKAI NO OWARI)

日本のバンドSEKAI NO OWARIの名曲を紹介した。精神疾患の患者である「僕」が、自身の抱える苦痛を歌っている。歌詞からは、入眠や起床といった基本的で生理的な行動すら苦痛を伴うことが読み取れる。投薬もされているようだが、抗うつ薬や抗精神病薬は、「僕」から苦しみや絶望だけでなく、楽しみや希望も奪ってしまい、必要十分な治療ではない。私の周囲で精神科や心療内科にかかっている人を見ても、同様のことが推測される。科学的根拠に基づいた治療でも満足を得られないのなら、医療者には何もできないのだろうか。

緩和ケア実習のテーマ“To Cure Sometimes, To Relieve Often, To Comfort Always”に則れば、医療者にできることはまだ残されているはずだ。人間は超能力者にはなれないが、少なくとも患者の苦痛に共感するための努力や、苦痛を和らげるための姿勢が必要だと考える。具体的には傾聴や対話が重要な役割を担うのだろう。精神疾患に限らず、苦痛の緩和を必要とする患者さんは、暗闇の中で半強制的に自身の生きる意味と向き合わされている。そんな患者さんの助けになりたいと思う。

金沢大学医学生と「生と死」を考える： 麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告(その7)

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科(緩和ケアセンター)

山田 圭輔

今年度も石川県高度・専門医療人材養成支援事業の補助を得て、令和3年度医学類5年生全員のレポートを『金沢大学医学生と「生と死」を考える(第11号)』として編集した(図)。本稿ではこの中から、佐藤菜乃初さんと千葉環樹君(写真)のレポートを紹介します。

1) 先生が生徒へ遺した難問

私は15歳の頃、米国の学校内の寮に住んでいた。ある日の夜、突然テレビで見るような銃撃事件による「ロックダウン」があり、自分の部屋から出るなど指示があった。しばらくして全員が無事だと伝えられたが、次の日に教員が銃で自殺したことを知った。彼は高校生と不倫をしており、また重度の鬱病を抱えていた。学校が彼を解雇する前に起きた事件だった。

私は大きなショックを受けた。彼の歴史の授業は私のお気に入り、彼とは楽しく接していた。彼の妻も話しやすい教員で、とても良い夫婦だと思っていた。しかも最近に赤ちゃんが誕生し、私は友達と遊びに行っていたのだ。なぜ、彼は命を終わらせなければいけなかったのか。それが正しかったのか。彼は死の直前に妻や子供のことを考えたのだろうか。私達が彼を尊敬していたことは知っていたのだろうか。罪を抱いてでも生きるのが良かったのではないかなど、尋ねたいことが多くある。

今でも、彼は心の病に人生を奪われたのか、罪に奪われたのかよく分からない。しかしこの体験から、目に見えない心の病も、身体に潜む悪性腫瘍と同様に命を脅かす病気であり、深刻になる前に発見して対応しないと当人も周囲の人も苦しむことになる痛感した。彼のように複雑な状況に陥った人を救うことが簡単でないことは分かっているが、私は彼に「あなたは私にとって素晴らしい先生だった」と伝えたかったと今でも思っている。



写真：医学生4名と緩和ケアチームスタッフ
矢島(麻酔科蘇生科)、上木、石津、佐藤、千葉、筆者、佐伯(専門看護師)

2) Tamaki! I always have your back!

“Tamaki! I always have your back!”
米国で学生生活を過ごす私をいつも親身に支え、時にはジョークも交え、人生の先生として私を導いてくれたのは、サッカーのコーチであった。彼は私をホームパーティーに誘い、時にはお酒を交えて人生を語ってくれた。私の米国での大学生活は、彼あってこそといっても過言ではない。

大学3年生の夏、私はサッカーや授業や研究、将来設計に追われる日々を過ごしていた。変えることができない過去に悩み、未来を思い不安で一杯であった。そんな時、彼が急性心筋梗塞のため亡く

なった。私の頭の中で渦巻いていた思考は突如として空白となった。やらなければならないことなど何一つなかったのだと思った瞬間であった。

その後しばらく空虚な時間を過ごしていたが、彼が生前に残してくれた言葉“*We are given absolutely nothing. We've got to earn absolutely everything.*”に救われた。私達に与えられたものなど何一つない。だからこそ過去と未来にとらわれることなく、今この瞬間を生きなければならないのだ。私は、将来医師として患者と家族の肉体および精神的な生死に触れるだろう。コーチの言葉を胸に、私なりに彼らの刹那に寄り添い、今を生きることを意味と共に考えることができる医師になりたい。



図：金沢大学医学生と「生と死」を考える(第11号)の表紙

著書紹介

「北の大地に馳せる医師の絆」に寄せて

千葉大学名誉教授・千葉大学真菌医学研究センター進化生殖学特任教授 生水真紀夫

著者の飯田和質(いいたかずただ)博士は、本学を昭和30年に卒業された。北海道日高に生まれ、旧制弘前高校を経て金沢大学医学部(旧制金沢医科大学)に進学し、卒業後は産婦人科医として永く北陸の医療に貢献された。福井県立病院副院長を退任後、80歳を過ぎて精力的に著作活動を始められた。本書は5作目に当たる。

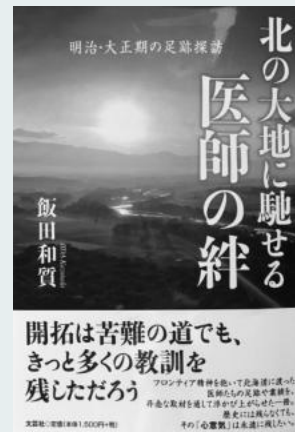
飯田和質先生は、温厚な人柄でいつも上手に人を褒めておられた。多くの産婦人科医が先生の元で育った。この紹介文を書かせていただいている小生もその一人である。

本書のタイトルは、「北の大地に馳せる医師の絆」である。明治期の北海道では開拓移民が増え、医療需要が急増した。厳しい自然環境に挑む開拓民には医療の支えが必要不可欠であった。本書には、増加した需要に答えるべく渡道して開拓民とともにフロンティアに挑んだ医師達の実像が描かれている。明治・大正期の北海道に医師養成所はなく、本州各

地の医学校を卒業した医師達が渡道して医療を支えた。飯田和質博士は十全同窓会出身の渡道医師の記録を調査して、渡道後の生活が医師にとっても開拓民と同様に不安定で厳しいものであったことを明らかにされた。本書には、金沢大学医学部の前身となった医学校の卒業生たちが、どのようにして困難を乗り越えていったのかが記録されている。膨大な資料の調査とご子孫に当たる方々へのインタビューに裏打ちされた記録である。開拓民は全国からのいわば寄せ集めであったが、医師もまた寄せ集めであった。寄せ集めは弱みでもあったが、逆に志を同じくして集まった医師達が出会って新たな絆を結ぶこともできた。広い北海道の各地に、さまざまストーリーが出来上がっていったことを読み取ることができる。それほど遠くない過去に、北海道に医療「フロンティア」があったことを改めて気づかせてくれる。

飯田和質博士の曾祖父(戸籍上は祖父)は、彦根藩出身で明治4年に日高に渡り開

拓団を率いて大いに活躍した人物である。その活躍ぶりは3作目の著作「飯田信三伝(日高開拓に尽くした或る先駆者の物語)」に語られている。飯田和質博士の「ファミリーヒストリー」である。本州から北海道に渡って活躍した祖父、逆に北海道から本州に渡って活躍された飯田和質博士、今回の著作は再び本州から北海道に向かう人達の記録となっている。北海道への熱い思いが伝わってくる名著である。



飯田和質『北の大地に馳せる医師の絆』(2022.4,文芸社)

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、
寄稿をお待ちしております。

〒921-8640 金沢市宝町13-1
金沢大学医学部十全同窓会 会報編集委員会
TEL. 076-265-2132
FAX. 076-234-4208
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

学生コーナー

高い高い壁

医学類4年
原口 葵

「医学部に通っています」と話して、「医者ってどんなお仕事?」と聞かれたことはまだかつてありません。医師は私たちにとって身近な存在で、仕事内容など誰もが当たり前想像できるからでしょう。病気の診断を行い、治療する。医学部1年生から4年生前半までの勉強はまさに、病気とは何か?と向き合うものでした。必死に骨の名前を覚え、薬の羅列に発狂し、教科書を床にたたきつけたくなる3年半でした。特に4年生では、地獄のようなテストラッシュ、医師の仮免許試験と言われる共用試験・CBT(Computer Based Testing)、実技試験のOSCE(Objective Structured Clinical Examination)という大きな関門があります。これを突破しなければ、病院での実習はもちろん、5年生への進級もできません。無事すべてのテストをクリアし、11月から病院での臨床実習が始まりました。

まず初めに感じたのは、現場で向き合うのは「病気」ではなく「人」であるということです。今まで必死に病気の名前、治療法を机上で学んできましたが、実際の患者さんの訴えはさまざまです。目の前にいる人が何に困っているのか。何を求めて病院に来たのか。病気を診るだけでなく、患者さんという目の前の人を診るということに、医師という仕事の面白さ、

難しさを感じました。

そしてもう1つ、私は大きな壁にぶつかってしまいました。実習が始まって2週間ほど経ったある日。指導医から、自分の受け持った患者さんの治療について問われました。

「この病気の根本的な治療法は、まだありません。進行を遅らせる治療があります。自分が主治医ならどうするか考えてみてください」

私は「進行を遅らせる薬があるなら治療したらいいじゃないか」と思いました。治療法があるならしたほうが良い、それが医師の当然じゃないのか、と。しかし調べてみてわかったのです。治療の効果があつたとしても、延ばせる命は約3カ月。正直「“たった”3カ月か」と思いました。人生100年時代と言われる世の中で、最善の治療を施したとして、3カ月しか延ばせない。この3カ月間にどんな意味があるのだろうか……。患者さんにとっては、かけがえのない時間でしょう。しかし、あつという間に過ぎ去り、すぐに死がやってきます。

悶々とする私に、さらに考えさせられる出来事が襲いました。市中病院の実習で、終末期医療の現場を目にすることになったのです。人工呼吸器をつけ、話すこともできず、寝たきりの患者さんでベッドが埋め尽くされていました。中には、大学での担当患者さんと同じ病気の人もありました。どんなに治療をしても最期はこうなるのだ。避けられない辛い現実、心が重く沈みました。

私は昔から、「人を幸せにするのが医師の仕事だ」と思ってきました。仕事、趣味、家庭、何をすることも、健康でなければ楽しめません。健康という土台が

あつて初めて、人は幸せになれる。だから健康を守る医師は、人を幸せにできる憧れの職業でした。しかし実習で知らされたのは、「医療がもたらすのは一時的な健康であり、死を前にしては無力」のリアルでした。重病患者の命を「たった」3カ月延ばしたとして、どんな意味があるのか。高い高い壁が私の前に立ちました。「延命の意義はともかく、患者さんがやりたいと言えば治療すれば良いし、やめたいと言えばやめたらいいじゃないか」という意見も聞こえてきます。ですが、「治療はしない、早く死にたいのです」と言われて、その通りにしていいのでしょうか。

この「たった3カ月の延命にどんな意味があるのか」の根底にある問題は、「死」です。人は必ず死ぬ。これは、誰がどんな努力をしようと、変えることのできない事実です。どんなに頑張っても、苦しい思いをして治療しても、必ず死んでしまう。それなら、今死んだって3カ月だけ延命したって同じじゃないか。治療なんてしなくてもいいじゃないか。そう聞かれたら、どう答えたら良いのでしょうか。

「少しでも生きる道があるのなら頑張りましょう」わずかな延命にもYESと言える「医師の仕事」の本質は何なのか。この大きな問題の答えが探せるよう、患者さん1人ひとりと真剣に向き合い、学び続けていきます。

最後に、実習にご協力いただいている患者さん、親身にご指導くださる先生方に厚く感謝申し上げます。臨床実習はこれから、6年生まで続きます。実際の現場でしか学べないことをたくさん吸収し、実りのある実習にしていきます。

キャンパスビジット2022(オープンキャンパス)

夏季Webキャンパスビジット

日程/令和4年8月3日~16日

(9日・10日はリアルタイム配信)

秋季対面型キャンパスビジット

日程/令和4年10月23日

場所/十全講堂ホール

令和4年度のキャンパスビジット(オープンキャンパス)が上記の日程で行われました。8月は全学類共同で開催され、Web特設サイトにおいて多数の一般公開動画とともに50本以上の限定動画が公開され、リアルタイム配信日には

学類紹介、模擬講義、入試・学生生活・留学相談会などが実施されました。医学類では模擬講義として、1日目は矢野聖二教授による「肺がんの最新治療はこれだ!」、2日目は松下貴史教授による「人体最大の臓器“皮膚”について学ぼう!」が配信されました。チャットには講義内容や大学生活に関する質問が多数寄せられ、その場で矢野先生、松下先生、山本靖彦教育委員長、安藤仁学生支援委員長が口頭で回答いたしました。2日間で444名が参加し、全国の多くの高校生に金沢大学医学類の魅力を知ってもらうことができました。

また、10月23日には、医学類への進学を積極的に考えている高校2年生以上

を対象に、オンラインのみでは伝わりにくい部分を補うべく、医学類単独で対面型のオープンキャンパスを実施いたしました。当日は105名の参加があり、山本教育委員長による学類紹介と、原田憲一入試委員長および医学類2・3年生7名による質疑応答・懇談会が行われました。

キャンパスビジットは、優秀で意欲の高い学生を集めるためには必要不可欠なイベントと考えています。すばらしい同窓生の輩出につながるよう、今後も工夫、尽力していく所存です。

(安藤 仁:記)



ご寄附をいただきました

さんご会



第16回金沢大学ホームカミングデイ開催

令和4年10月29日(土)、本学角間キャンパスにおいて、第16回金沢大学ホームカミングデイを開催しました。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、十分な感染症対策を施した上での開催となり、歓迎式典には133名、懇親交流会には132名の卒業生及びそのご家族等にご出席いただき、盛況な1日になりました。

歓迎式典では、最初に本学合唱団が校歌を斉唱しました。(参加者は黙唱)

続いて、^{わたしたし}和田隆志学長の歓迎挨拶、^{あかたてき}安宅建樹金沢大学学友会会長の祝辞の後、^{なかむらしんいち}中村慎一理事・副学長から金沢大学の近況が報告されました。最後に、現役学生の現状について、学生の留学体験報

告(2名)・課外活動体験報告(ボランティアさぼりとステーション・1名)を実施し、出席者からは好評をいただきました。

特別講演では、「企業研究、大学産学連携活動を経て知った大学発ベンチャー／スタートアップの重要性」と題し、公益財団法人都市活力研究所上席研究員^{きたがわまさとし}北川雅俊氏(昭和52年工学部卒業)にご講演いただきました。

歓迎式典終了後には、金沢大学学友会第12回役員総会が開催され、役員交代による委嘱及び会議等の報告が行われました。

夕刻からの懇親交流会は、安宅学友会会長の乾杯の発声で始まりしました。会場では、本学卒業生の木管アンサンブル

〈ナチュラル・クインテット〉により、開始前と乾杯後に演奏をいただき、懇親交流会はその素晴らしい調べに大いに盛り上がりました。今回は、現役学生も交流会に参加して、OBからキャンパス、授業風景、サークルなど学生生活の懐かしい話で交流を深めました。

また、午前中にキャンパス見学会(4コース：81名)を実施しました。

次回、第17回金沢大学ホームカミングデイは、令和5年10月28日(土)に開催が決まりましたので、校歌の調べを聞きに、懐かしい母校にぜひお越しください。

(学友支援室長 米林 利晃：記)



寄附制度のご案内(金沢大学医学教育研究支援寄附金)

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年9月に本学類・系が行う教育・研究に役立つことを目的とした「金沢大学医学教育研究支援寄附金」を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学 医薬保健学域医学類長
医薬保健研究域医学系長
杉山 和久

【担当(お問い合わせ先)】

〒920-8640 金沢市宝町13-1 医学類B棟1F
金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
Tel : 076-265-2115
E-mail : t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

- ・ 電子メール又は電話でのお申込み
上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。
現金のお持ち込みにより、ご寄附いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

- ・ 寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。(※所得税法、地方税法ともに2千円を超える寄附額から控除対象となります。)
- ・ 寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。

①自動引き落とし(手数料本会負担)

お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。
折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。
是非この機会にご検討くださいます様お願いいたします。

②払込用紙(手数料本会負担)

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

③銀行ネット決済(ネットバンキング)

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。
(お振込の際は、ご氏名の前に会員番号のご入力をお願いいたします)
北陸銀行 小立野支店
普通預金 6051047 金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局

TEL : 076-265-2132 FAX : 076-234-4208 Email : juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

金沢大学医学部 十全同窓会
会員情報変更受付

— LOGIN —

会員番号（※半角数字）

パスワード（※半角英数字）

パスワードをお忘れの方 →

LOGIN NOW →



金沢大学医学部 十全同窓会
会員情報変更受付

- (1) はじめての方は、事務局より各会員様へお届けしております封筒に記載されている「会員番号」と「仮パスワード」を入力してください。入力やログインがうまくいかない場合は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。
- (2) 会員番号とパスワードが一致する方のみ、認証されます。入力内容にお間違えのないようご注意ください。
- (3) 操作方法がわからない場合は、下記お問い合わせ先までご連絡ください。

連絡先の変更・ご異動の際は、
金沢大学医学部十全同窓会会員情報変更サイトをご活用ください

URL <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member>

会員情報変更はこちら



ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL : 076-265-2132

Email : juzen-ob@med.kanazawa-u.ac.jp

 ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る“舞台”という発想のホテルです。
地上30階、高さ130mは北陸随一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一（縁）のおもてなし。

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1 (JR金沢駅兼六園口前)
Tel: 076-234-1111 Fax: 076-234-8802

ホテル日航金沢 検索 www.hnkanazawa.jp

十全同窓会 会員の皆様へ

団体 会員総合補償制度 募集開始のご案内

(正式名称：団体総合生活保険)

金沢大学医学部十全同窓会では近年厳しさを増す医療訴訟の防衛策として、また会員の福利厚生充実を図るため、「会員総合補償制度」をご用意いたしました。多くの同窓会員にご加入いただくことで、スケールメリットを活かした団体割引が適用され、魅力ある制度になります。

保険開始は2023年9月1日ですが、本年早々から募集を開始いたしますので、この機会に是非ご加入をご検討いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

十全同窓会

募集商品のご案内

- 医師賠償責任保険 … 万一の医療事故による高額賠償への備えとして
- 所得補償 … 病気やケガで働けなくなった時の備えとして
- 団体長期障害所得補償 … 長期間働けなくなった時の備えとして



まずは専用パンフレットをご覧ください。



ご加入手続き
資料請求は
こちら

PCの方、2次元コードを読み取れない方は
URL <https://www.pioneerltd.com/juzen/>
もしくは 十全同窓会 パイオニア で検索!

保険期間：2023年9月1日(金)午後4時～2024年9月1日(日)午後4時

【お問合せ先・取扱代理店】

PIONEER 株式会社パイオニア

Tel: 0120-36-8442 (平日 8:45～18:00)

<https://www.pioneerltd.com> メール sraff@pioneerltd.com

この広告は医師賠償責任保険、団体総合生活保険の概要についてご紹介したものです。保険の内容はパンフレットでご確認ください。また、ご加入にあたっては、必ず重要事項説明をよくお読みください。詳細は団体代表者の方にお渡ししてあります保険約款および特約によりませんが、ご不明な点は取扱代理店または引受保険会社へお尋ねください。

会報編集委員の紹介

学内編集委員(14名)

蒲田 敏文
中村 裕之
横山 茂(副編集委員長)
絹谷 清剛(編集委員長)
佐々木素子
篁 俊成
和田 隆志
杉本 直俊
谷口 巧
山本 靖彦
中田 光俊
倉知 慎
毎田 佳子
濱口 儒人

学外編集委員(21名)

山口 成良
佐藤 保
三輪 晃一
橋本 琢磨
中村 信一
勝田 省吾
山本 健
山本 博
山岸 正和
太田 哲生
大村 健二
横山 仁
大島 徹
横山 修
中本 安成
高村 博之
常山 幸一
古川 健治
古市 賢吾
若山 友彦
中西 清香

以上35名で構成されています。



表紙の写真

病院中庭のオブジェ

金沢大学附属病院の中庭は、外来と病棟をつなぐ廊下から眺めることができます。白いオブジェが浮遊する不思議な空間は、見る人の心をなごませます。

題字：山本 健(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会
会報編集委員会
〒920-8640 金沢市宝町13-1
<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：令和5年1月26日

印刷：能登印刷株式会社

2023年度会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

新年明けましておめでとうございます。十全同窓会会報183号の校了を目前にし、この拙文を書いています。私は、新年早々、イタリアにおいてイタリア人らの共同研究者と共にイタリアにおける疫学研究に取り組んでおります。やっと海外での研究活動が解禁されるようになったことは、本当に嬉しい限りです。コロナ禍では、海外に行くことは学会発表すらできなかったことから、海外で共同研究活動ができるようになったことは、やっとコロナ禍の前の状態に戻ったことにもなりますが、とりわけ海外との連携を加速化することは、金沢大学の研究力・教育力の一層の発展に繋がると言うことができ、極めて重要と言えると思います。

本号では、神戸大学をご卒業されました多田 薫先生が金沢大学教授にご就任になられました。十全学術行脚の順天

堂大学編では、石崎陽一先生と八田耕太郎先生が、異国の地で教授になられ、ご活躍されておられることを拝見しました。本学卒業生が他大学で教授に就任されることは、大変なご苦労の証しだと思いますが、同時に本学の発展に欠かせないことであると思います。英国では、一部、出身大学者が母校の教授になれないという制度があると聞いております。このことは大学の自浄作用と改革にとっていい方向に働いていると聞いております。このことは制度そのものよりも、他大学との交流、交換がいかに大切であるかを問いかけていると思われれます。末筆になりますが、同窓会の皆さまのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

(中村 裕之：記)